
血族の譜

ゆずこせう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血族の譜

【Nコード】

N4155F

【作者名】

ゆずこせう

【あらすじ】

帝國と王国。時に結び、時に対立する二つの国の間で翻弄される人々。王族、双子、兄弟、そして、異端の血。2人の少女がその運命を分けたとき、大きな歯車が動き始める。

葬列

その生まれと生前の身分から見れば追悼式そのものはいたって簡素だった。

それでも、列席者の数はたいへんなものだった。生前、故人が関った人がいかに多かったかが伺われた。

そんなわけで、最も大きな聖堂で肅々と執り行われた儀式は、大勢の見守る中、しかしほとんどしわぶき一つ立たないと言う不思議なものであった。

聖堂の正門の前には車寄せにも使える狭からぬ広間があった。内部は報道陣からシャットアウト、そして、一定の間隔をおいて警察によって封鎖されていた。まだまだ事件の余熱は世間に満ち溢れている。不測の事態は常に恐れねばならない。

鐘がここでの儀式の終了を告げていた。すると、思い鑄鉄製の扉が開き、参列者たちがぞろぞろと湧いて出てきた。

ここで椿事が起こった。制服警官の人垣で止められていた報道陣の一部がかいくぐるように、参列者たちのもとに走ったのだ。

だが、大半がなにごとかをまくし立てようとする刹那、私服、制服、様ような官憲に取り押さえられ、また人垣の向こうに押しやられた。

男は自分の車に近づこうとしたとき、視線を感じて振り返った。その人物を見て目をすばめた。

「ずいぶんうまくもぐりこんだもんだ。」

「いえ、私も正式な参列者の1人ですよ。」

にび色の礼装に身を包んだ男は微笑んだ。

「ここで話すことなんか無い。無駄だよ。それに」

相手の目を見ながら言った。

「私はもうただの一市民にすぎない。値打ちの目減りした先祖の財産が明日はいくらで売れるか気をもむ田舎の斜陽紳士だよ。」

「愛していらっしやった。そうですね？」

男は相手に目を眇めた。だが、すぐに目元をもとにもどす。相手は少し驚いた。あれだけの感情と理性の相克に一瞬のうちに折り合いをつけさせてしまった。天賦と訓練、双方よほどなければできない。

まだまだこの人は…。

「愛というべきか。定義が難しいな。ただ、かつて好意をもったのは確かだよ。」

もう失礼するよ、と言うと、かつての大官は専用車の後席に乗り込んだ。いつもいつも付き添う目立たぬ運転手がドアをしめ、彼に一瞬会釈を送り、そして前席に乗り込んだ。

見送った男はもう次の目当てを見つけ出した。

彼と同じにび色ながら、清楚さを感じさせる喪服を着た若い女。そして彼女に付き添われるように歩く10代の少年少女。男のほうが少し大きそうだ。

「埋葬まで立ち会うの？」

「いえ…。あちらはごく限られた人しか参列しませんから。」

「君は…どうするつもりなんだい？」

「この子達を送り届けてから帰郷します。」

少年のほうに目をやり男は尋ねる。

「いいのかい？」

意外なことに少女のほうが口を開いた。

「いいんです。兄は自分が死ぬまで一緒にいてくれると約束しまし

た……」

「自分から言っただんです。蘇生までにしてくれ、転生は要らないと。」

兄が目を伏せながらぼそりと言った。

「私が帰郷してからならいつでもいらしてください。しばらくは乏しいながら父の遺産の整理で家にいますから。」

女は凜とした口調で言った。

男は少し観念した。だが、どうしても聞かねばならないことがあった。

「君に……君たちにとって、あの人はどんな存在？」

「忠誠の対象でした、以前は。今もそれはあります。でも、1人の女性として尊敬もしていました。」

「……でも、憎んでいました。そう、殺したいほどに。」

3つの人影はそれを最後に彼から遠ざかる。

3人目の少し年かさの男は待つてましたとばかりに彼にしゃべり始めた。

いわく、生まれ故郷を裏切った売国奴、他国に嫁したとはいえ、その地で弑逆を犯した国事犯、多数の人々の命を刈り取った血塗れた魔女。

「本来なら、こんなセレモニーなぞ。わが弱腰政府めが軟弱外交に屈しおつて……」

宿に帰って窮屈な上着を放り出す。

少し椅子でぐったりしたあとで男はタイプライターに向かった。

報道管制も逆宣伝も盛んであり、なによりも大衆はわかりやすい物語にとびつく。今書こうとしている記事がそのまま没にならない可能性はほばなかった。しかし書かざるをえない、そう思った。

まずは、新聞の見出しだけで世界がわかった気になれるおめでたい
大多数用に耳障りの良いテキストを、しかし、胸の疼きを押し殺し
て打ち終わる。嫌なことでも目を瞑ってやれば意外と早く片付くも
のである。

次に取り掛かるのは、まず、一杯が必要だった。いつどこでも、戦
場でも手放さないアルミのキャンティから琥珀色の液体をコップに
注ぐ。

こんどの執筆は徹夜を覚悟せねばならないことに気がついていた。

救済

王子は決意した。

苦しむ者は救わねばならない。

悲しむ者は慰めねばならない。

怒りに打ち震える者は、その憤りを溶かさねばならない。

王家の実権はすでに王太子である自分に移っていた。

長々と君臨し続けた王は、すでに老いてほとんど病床にあり、それゆえほとんどの政務や軍務、さらに夥しいことも、王室にまつわる実を取るに足らない、しかし手を抜けないこと共最近ほとんど彼の肩にかかつてきていた。

しかし、彼はそれを受け入れ、むしろ、過重にすぎるその毎日を楽しんでいるかのようにだった。

おかげで、国政は近年にわかに治まり、国民の炊付きの道も、かなりの改善を見せていた。すでに国内の新聞の中には名君と持ち上げる者まで現われた。

そのためか、最初、心配顔の宰相以下の大臣どもがしつこく勧めた摂政の選任など、このところほとんど耳にしなくなっていたのだった。

意気軒高な王子はさらに思った。

苦しむ者は救わねばならない。

悲しむ者は慰めねばならない。

怒りに打ち震える者は、その憤りを溶かさねばならない。

どんなに平和で豊かな社会でも、日のあたらぬ者たちはいるものだ。

王子は国民によびかけ、貧しい寡婦、みなし子、身体に障害がある者たちを救済しようとした。

国中の役場にある日人々が集まった。

皆それぞれ興奮した面持ちで、新しく開始された弱者救済の国民運動の歌を放吟し、鳴り物を先頭に、シンボルの緑とオレンジのリボンやスカーフを振り、蒔きながら町中を練り歩いた。

そして、貧者の家庭の入り口には、その2色のリボンの付いた救援のためのパンや野菜が、菓子が、玩具が積み上げられた。

運動にかかわる膨大な出費は、その年に大儲けした商人や工場や鉱山の持ち主から喜捨という形で受け付けた。

すべての人が常にいつまでも豊かで金持なわけではない。いずれ貧窮する日も来よう。そのときのために、と王室から派遣されたそろいの制服に身を包んだ者たちが謳い上げた。もちろん、異を唱える者もいた。だが、その者たちは派遣された者共にいずこかへと連れ去られた。

実際、派遣されてきた者たちは一様に若く、快活で頭がよく、しかも美しい容貌をしていた。

女たちの多くが、彼らが集まって集会を開くと聞くと争って会場を取り巻いたほどだった。

自分の統治に大いに自信を深めた王子はさらに思った。

苦しむ者は救わねばならない。

悲しむ者は慰めねばならない。

怒りに打ち震える者は、その憤りを溶かさねばならない。

隣国とも、そのさらに隣国とも当然外交の誼を結んでいた。

ところが、隣国はそのさらに隣国に対してはよく思っていないかったようだ。

ある日、隣国のそのまた隣国の鉱山会社が、隣国の領土の地下にま

で坑道を掘り進んだことがわかった、と隣国がテーブルを大きな拳で殴った。

どうしてわかったかは今でも歴史家は謎だという。ただ、それを理由に隣国は隣国のそのまた隣国に軍を侵攻させた。

王子はさっそく、隣国に使いして、戦闘行為を停止するよう求めたが、にべもなく拒絶された。そこで、王子は自ら最強と目される軍団を率い、隣国に攻め込んだ。

錐のように鋭く敵領内を進撃した王子の軍は、ついに隣国の首都を陥落させた。

その間、王子の軍の将兵は悪鬼のごとく戦い、敵将兵を屠り続けたのみならず、通過する町や村で凄惨な破壊と死を齎した。

男は殺され、あるいは奴隷として使役され、女は陵辱された。6歳から80歳のすべての女性が襲われたという。

しかし、王子は、隣国のそのまた隣国の民を救い、その報復を代わりをしてやっているのだと言った。もう隣国の民は隣国のそのまた隣国の残忍でしつこい報復を恐れる必要はないとも。

しかし、丁度そのとき、実に小さなつまづきが襲った。

王子の末の妹。一番小さな王女が病を得て死んだのだ。だれよりも彼女を可愛がった王子は悲嘆にくれた。

あまりの愁嘆を見かねた臣下が、ついに別の友好国の皇女を彼と見合わせることにした。

一目見て彼女の聡明さと美しさに惚れ込んだ王子は早速婚礼の儀を執り行うことにした。

国中がお祭り気分に分かれる中、宮殿のバルコニーに幸せな2人が立った。

翌年、王が崩御すると王子は正式の即位の儀の日を迎えた。

そして、さらに3年後、新しい王は死んだ。

王妃の手引きにより、国軍の不満分子と恨みを抱く隣国の遺臣、そして、彼が救ったはずの隣国のそのまた隣国の者まで加わって、ある夜、警護厳しきはずの王宮に、得物を手に手に侵入したのだ。

翌日王の死が公表され、代わりに健気に振舞う王妃が新女王となって即位することも公表された。

女王は薨去された前王に取り入り、彼を盲目にして国の舵取りを誤らせた者どもがいたと口を極めて糾弾した。

さっそく先王に近い者、賛同する者や忠義者たちが槍玉に上がり、獄中に、あるいは処刑台に消えていった。

先王の遺臣のうち、若く美形だった国民行動隊の多くがなんらかの因縁をつけられて、捕縛され多くが処刑されたが、目端の利くものの中には、実はいくらか淫蕩の気があったとされる新女王に取り入り、親衛隊に居座る者もいたといわれるが定かではない

静い

暖かな春の夜。満月が蒼い光を夜空一杯に投げかけていた。宴もクライマックスに達して、さすがに暑苦しさを覚えた二人は、バルコニーに出て清らかで優しい木々の香りに満たされ、しかも適度にひんやりした空気にどちたからともなくすうつと息を吐き、そしてお互いを見て笑った。

今日は2人の誕生日。同年同月同日に誕生した双子の2人にとっては、年に一度のしかも最大のお祭り。今年もたくさんのゲストを招き、家の者たち総出で支度に大奮。

上はやんごとなき血筋にあたるお方から、下は2人の学友たちにあたる者たちまで、皆が口々に寿ぎの挨拶を2人に向け、そして2人の甲乙これまったくつけ難い美貌と才気を誉めそやした。

2人の父親の主君筋に当たられる皇族は満足そうに二人を見比べながら、畏れ多くも2人の母親に声をかけられ、かかる美しくも気立てのよい令嬢を二人も持てたは、神の配剤、うらやましき果報者よ、とのたもつて、母親をひたすら恐懼とうれしさから、柘榴の実のごとく赤面させていた。

父親は客の群れの中から彼女たちの学友たち数名に声をかけ、口々のしかし遠慮がちに話し始める少女たちから学びやでは2人が方や蒼、片や赤と色で呼び習わされている由来を満足そうに聞いているところであつた。

姉妹はバルコニーの柵にもたれて、月の光がぼおつと照らす、この家の主の所有にかかる田園や林が緩やかにかなたに広がるのを眺めていた。

小川の水面がそこだけ白かった。

「夢みたい。」

一応姉ということになっている娘が月を見上げながら言った。

「ええ、夢みたい。」

妹が足元の暗さの中、東屋の白いテーブルと椅子が光をあびてぼつと光るのを眺めながら言った。

でも、これが最後なのね、とは2人はとうとう口に出すことが出来ないでいた。

姉は明日以降、この屋敷にはいない。
今回お出でになった皇族の口利きで、皇太子付きの女官となるべく宮中に参内することになっていた。

一方家に留まる妹には、父親が許婚を選んでいた。
諸国との貿易で巨万の富を築いたさる分限者、その御曹司であった。

一目だけでも素晴らしい未来。
誰もがうらやむ輝かしい道が二人の前に広がっていた。

だが。

「やっぱりダメなんだ。」

姉がぼつんと言った。

「うん、やっぱりさ。」

妹がさらにうつむいて応えた。

姉はすべてについて前に向いて走っていくのが好きだった。

何者にも束縛されない自由。そして誰のためでもない、自分のためにすべてを勝取る事。

宮中とはそれはそれは旧弊なしきたりや隠微な嫉妬や陰謀が渦巻くところと若い身ながら彼女は知っている。

そんなところは御免被る。

妹は静かにかつ控えめに誰かを見守って行くのが好きだった。

内情なんてどうでもいい。とにかくすべてがきつちりと決まり、硬い揺るがざるモノの中、誰かに分に従って従うこと。

貴族とはいえ、その商人の倅はあまりに奔放に見えて、彼女の眉をひそめさせるのに十分だった。

なぜ、あのような男と添い遂げねばならぬのか。

女中頭が心配そうに様子を見に来た。

もうそろそろ、皇族がさすがに疲れてお帰りになられる。

商人貴族の倅は部屋の反対側でその他の女たちと呆けた莫迦話をしまくってさすがに飽きてきたようだ。

ああ、そうね、ごめんなさい。

お見送りにすぐおりていきますから。

2人はバルコニーを離れ、廊下に出てそれぞれの部屋に向かい、別れた。

姉は思った。あの子さえいなければ。

私1人なら、父も母も入内のお話を謝絶したろう。

宮中にはいることは、その家にとっては底なし沼に財産をすべてつぎ込むようなものだと聞く。かすかな話しか聞えてこないが、伝統ある家系を誇るこの家とて、実は内実は火の車なのだそうだ。

むしろ、貴族株を金で買った成り上がりとはいえ、あの商人貴族と

の縁つながりの方を特に父は優先したに違いない。

幸い、当主である新たな養父も、実は最近健康が優れない。その倅であるあの男はとんだうつけ者で、家督を継いだなら早晚身代を潰すのではないかという噂話を耳にしていた。

私ならば、と姉は思う。私ならば莫迦な夫を押し込めてでも再び海商王と仰がれた隆盛を取り戻して上げられる。

そうすれば、父母も、妹も幸せに

ここで立ち止まる。そう、あの子さえいなければ。あの子に入れ替われば、ことは成る。

一方、妹は思った。あの子さえいなければ。

私1人なら、父も母も二つ返事で私を入内させたらう。

宮中にはいることは、その家にとつてはこの上ない名誉。これは数に限りのある貴族の家の中でも選ばれた証。

少ししか聞いていないが、伝統ある家系を誇るこの家とて、何代にもわたって出すわけにはいかないようなのだ。

それに皇太子は今年17歳。そろそろ皇妃、あるいは寵妃をお求めになってもおかしくない。伝統的に外国から皇妃を迎える場合は、寵姫を宮中から、宮中から皇妃をという場合は寵妃も国内というしきたりになっていると聞く。

むしろ、皇太子殿下も皇帝陛下も、物堅いくらい控えめそうな女性を好まれると聞く。権謀渦巻く中とはいえ、気が強く衝突を起こしかねぬ姉以上に自分は適格ではないか。

確かの後物入りになりそうなのはわかってはいるが、ここはあの貴族株を金で買った成り上がりを適当にあしらっておだてながら搾り取ってやればよい。

私ならば、と妹は思う。私ならば殿下の寵愛を受けて、皇妃になるチャンスは遙かにある。そうすれば、外戚として父も、母も、姉も

ここで立ち止まる。そう、あの子さえいなければ。あの子に入れ替われば、ことは成る。

翌朝、夕べの華やかな喧騒はウソのように片付けられ静まり返った広間に入った女中頭は悲鳴を上げる。

駆けつける執事や召使たち、そして主人夫婦の目の前で、そろいの白い寝巻きを赤黒く汚した二人の乙女。

片や仰向けに伏せて血だまりに浮かび、虚空を光なく見る。

片や右手に白く光る刃を錆色に染めて佇み、黒く広がる床の染みを光なく見る。

いずれが蒼か、いずれが赤か。

問う術とてなし。

絆

私にとって、兄はいなくてはならない存在。

物心ついた頃からそうだった。

折角汲んできた井戸の水を、途中で躓いて全部こぼしてしまったとき、

物成りがあまりに悪い年、山になる木の実さえもこれっぽっちも手に入らないとき、

病弱な母がとうとう亡くなったとき、

近所の女たちや親戚の大人たちが、父なし子と影でささやき合っていたとき、

母の残した借金のカタと称して怖そうな男たちが私を無理やり連れて行こうと腕を痛いほど引いたとき、

やっと通えた学校で上級生の女の子たちに口にするのも汚らわしい悪罵を浴びせられたとき、

働きに出て、わずかな稼ぎでは靴を新調できず、くたびれ破れた靴底から冷たい冬の雨水が足底を痛むほど冷やしたとき、

私の稼業を聞きつけて、只でさえ冷たい近所の女たちが益々穢れのように私を遠ざけたとき、

いつでも、しかし、兄はいつでもそばに来てくれた。そして肩を抱いて、なんとかその場を切り抜ける道を探してくれた。

彼は代償なんて求めなかった。いつでも小さく微笑んでくれた。

そして、手の中にいろいろなもの押し付け、握らせてくれた。お金だった事もある。

小さな可愛い装身具だったこともある。

すこしだけれど、舌が蕩けそうなお菓子だった事もある。

もちろん、涙の雫を手のひらに落としたことも。

私は兄が大好き。

兄のためなら何でもしようと思う。

たとえ、神様が眉をひそめるようなことでも、兄のためならやれる。もし兄に何か良からぬ事があるなら、真っ先に助けてあげる。

もしも害そうとする者がいれば、私がその者の止めを刺そう。奴らが最期に見るのは憎悪に赤黒く燃えた私の虹彩。

お兄様、どうかお命じになってください。

今、私の右手に握られた光り。刃渡り30cmの意志。

これの辿り着き、収まるべき場所を教えてください。

そう今、目の前に立つ黒々とした人影。

私の足が地を蹴った。

これなのですね、形容しがたい表情を作り、驚きと悲しみと憤怒に満ちた人物。

これこそが、お兄様、貴方が捜し求めていた、私たちに災いを齎した張本人とは。

私たちを畜生の道に落とし、生の穢れを齎した者は。

そう、私は闘う。私のすべてを曲げた者を倒すために。未来を汚泥に沈めんとした者を奈落に落すために。

そして、すべてが終わったとき、本当の私の生を太陽のもとに晒すのだ。

私は妹が実は嫌いだった。

あまりに鈍く、動作のおっとりした、しかも何がうれしいのか、顔を地べたに打ち付けて泥と血に塗れても、いつも笑っている顔が気に食わなかった。

あまりに毎度腹が立つものだから、妹がなにかトラブルるたびに、思わず心の中で思い切り舌打ちしながら、手をいつもさし伸べていた。せつかくの井戸水がこぼれてさすがにべそをかいたときは、一緒にまた汲んでやった。

よせばいいのに、土地も枯れ果てた裏の禿山に木の実拾いになんか行つて。案の定何もとれないと途方に暮れたときは、わずかな蓄えを持ち出して野菜や肉を購った。

世間の連中が言いたい放題噂しているのは良く知っていた。特に面白おかしく触れ回る近所の仕立て屋夫婦は裏通りでその良く回る舌のついた口から齒が全部なくなるまで殴り、詰まらんゴシップばかり聞きかじる耳は耳たぶごと削ぎ落としてやった。2度とそいつらは俺たちの事を触れ回らなくなった。

学校に行つても、いつもおめでたいためにいじめの対象者だった妹には心底頭にきたものだ。ある日、いじめの筆頭、影に陽に糸を引いていた優等生、生徒会の役員も勤める人望篤い最上級生の女を誘惑すると見せかけて衆人環視のもと、思い切り恥ずかしい姿に剥いて晒してやった。

借金取りが妹を拉致しようとしたときには、奪還し、多少の頓智を利かせてへこましてやった。わざと誰かが密告したのか、捕吏が駆けつけて問答無用で彼らを押さえ込み、さんざん棒で殴りつけながら連行して行った。

母が死んだとき、私は内心ほつとしたものだ。なんのかの言つても係累がいるということは、これから私がやろうとしていることにとつては、足手まといにしかないからだ。

物を考えるのが苦手な妹は、ほんの少し帆の向きを向けてやれば、風が続くまま、まっすぐ行ってくれる。

私たちが不幸なのは、何も神様のせいではない。そんな神なら、私何れも気まぐれに付き合ってやる義理なんかないのだ。なにかという神の名を口にして涙ぐむ妹を私はひそかに嘲笑していた。

私たち兄妹が不幸せなのは、あの男のせいだ。やはり少し世知に疎い母に私たちを産ませ、自分は富と名声の道を駆け上がったあいつ。それが目と鼻の先にいる。

探したのだ。あらゆる手段、あらゆる伝手、あらゆる不道徳をもつて。そう、妹に手を汚させる事も手段のうちだった。

妹は道具だ。言われたままに歩く彼女は私の指示にも忠実に、ついにあの男の目の前に立つところまで辿り着いたのだ。

私の目論見がすべて当たったのだ。見ろ、妹よ。私の言葉のみに従えば間違いはない。

しかし、どうしたことだ。妹の顔は蒼く光り、赤黒いものが瞳に煌いた。そして、白く光るステイレット。

金属をはためかせて、妹はあの男、自分の真の父親に突進していく。

私は思わず地を蹴った。

すべての筋書きは私の中にある。ところが初めて自分の意志をもつて、しかもあるうことか今まで忠実であった兄である私を裏切った妹がすべてを台無しにしようとしている。

奴を葬るのは私だ。私のやり方こそが、長い間考えに考えた策こそが、相手に耐え難い苦痛を与え、途方に暮れるような痛手を負わせ

られるのだ。だから妹よ、やめるのだ。これは私とお前の2人のための戦いなんだぞ。

そう、私は闘う。私のすべてを曲げた者を倒すために。未来を汚泥に沈めんとした者を奈落に落すために。そして、すべてが終わったとき、本当の私の生を太陽のもとに晒すのだ。

一瞬動転したかに見えた屈強な警護の者たちは訓練の賜物、すばやく動き出した。

いくつかの射線が2人を捉えた。

手紙

近所でも評判な其の男は、毎日毎日、判で押したような生活が続けていた。

年のころはもうそろそろ老境に達し、頭はほぼ白くなっていた。

男はいつもニコニコしながら、毎朝出会った近所の衆に挨拶を交わし、軽くびっこをひきひき近くの畑に出かけていく。

そこで採れた少々の野菜は自分で喰らう分量以外はすべて近在の町の広場で開かれる市に並べて売ってしまう。

午後になると、野良着を着替えてとことこと町の方へ出かけていく。

一度郵便局により、ときどき銀行や役場により、毎日必要品を買いに店によるのが日課。

町でなじみの食堂兼飲み屋に行き、そこでぬるいビールを片手にやってくる常連たちと他愛ない話に少し声のトーンを上げ、夜もすっかりふけてきたところで嘸にも飽きたという按配で家路につく。足を少しひきずりながら。

春夏秋冬いつもいつもこのありさま。

ときおり子供たちの相手をして、風を揚げてやったりしている姿も近所の衆には見慣れた光景。村の分教場の先生はああ、またかと肩をすくめた。

うまく作れず、上げられない子供が彼のところに赴くと、目を細めながらちよっこつと細工。やさしくアドバイスを授けながらその子に上げさせると、さっきの無様な様子がウソのよう。晴れ渡った空に高く高く上がっていった。

酒場の仲間は首を振る。

そんだけ物知りなのに、なんでこんな場末で貧乏暮らし。

都会に行けばもっとお偉くなれたろうに。

答えていった。

都会の暮らしは面倒なだけ。この年寄りにはついていけん。
あれは若い者が住むところ。

昔は一体何をした？

ずいぶん旅をしたようだ。こちらの者が知らないような遠い異国の
ことがぼつぼつと話題の隙間から零れ落ちた。

男の額には十字傷。いつも前髪を下げているのでわからないが、最
近少し頭髮がさびしくなったか、覗けて見える。

ある日郵便局に寄った彼は、いつも空の私書箱に封筒が2つ入って
いるのに気がついた。

其の日は寄り道もせず、日の高いうちに家に帰り、夕餉の煮込みを
パンと一緒に食べると、お茶を片手に机に向かう。

一枚目

顔がほころんだ。

あれから、もうずいぶんたつ。たった一人の一粒種。あのころ、ま
だ学校に通っていた娘。

ずいぶん酷い目にあわせてしまった。

あのころ毎晩のようにアルコールで思考力を減退させ、あらぬ妄想
にわしづかみにされていた頃。毎晩のように妻との口論。ぶつ壊れ
る器物。泣き崩れる女。

そして、ある朝、気がつく、家の中に取り残された自分がいた。

そうか。もう一人前になったのか。首都で学校を卒業し、今は立派
に職を得ていると書いてあった。

あなたをけして忘れたわけではありません。

あの頃のお父さんは怖かったけど、

今は少しはわかるような気がします。

お母さんもあの後恨み言は言いませんでした。

でも、お父さんのことが出るといつも少し涙ぐみました。

そんなお母さんが亡くなりました。

いまわにきわにお父さんに会いたいと言いつづけていました。

私は、今度、そちらに行きます。

丁度そちらには仕事の用事があるので、少し無理を言ってお父さんに会いに行きます。

静かにうずくまった。

娘は許すという。しかし、。

お前が俺の何を許すというのか。娘の気持ち痛いほどわかるゆえに、彼は耐え難い心の痛みに胸をますます強くつかまれた。

それは2枚目の中身を見てしまったから。

かつて国軍の精華と謳われた男。敵国深く進攻した王太子親卒の軍団でも最精鋭と称せられる快速機動部隊の将校。それが彼だった。

ある日の夕刻、疲れた兵たちを休ませるため宿営を張った森に、奴が現われた。

まぶしすぎる夕陽を背に、汗馬を飛ばして奴の率いる騎兵の群れが野営の支度を整える味方の間に踊りこむ。

燃えいるような緋色の目に炎のような髪と頬髯。現地語で雄叫びを上げながら、奴と奴の手兵はカービンを兵の頭に擦り付けて撃ち放し、剣を振り下ろして肉体を粉砕していった。

男は最初の動転から立ち直ると、手近にあった小銃を握り、目に入ったものどもかまわず撃った。

態勢がようやくととのい、機銃が火を吐き始めた頃、しかし、焼け

たテントや装備、血潮をぶちまけた夥しい死体を残して奴は去っていった。

男は銃火もかまわず、走りより迫った奴に大きな騎兵刀で腰と足をなぎ払われ、地を朱で染めて倒れていた。

負傷がようやく癒えた彼を待っていたのは、なんとも不愉快で不審な決定。

未だ完治せぬ下半身を杖で支えたまま直立した彼に、上司である師団長は除隊勧告をぽつぽつと申し渡したのだ。

味方が戦争で勝利した以上、あの森での敗北は表ざたにはしたくない。ましてや今回の停戦は王女様ご逝去というウラの事情ゆえ急遽まとまったとは、公然の秘密なれど、あからさまに新聞などに話題にされるのはよろしからずという事情もある。

ここで貴官を査問、軍法会議という形で遇すれば、口さがない新聞屋どもの詮索がうるさく、せっかくの国軍の勝利の輝きも曇ろうというもの、だから、この際自ら身を引いてくれんか。普通に予備役、恩給もつく。

歯噛みするほどの悔しさであったが、男は受け入れた。

しかし、男にとってなおのこと絶望に突き落とされる事態がやってきた。

王太子が王に即位して3年後、突然崩御された。そして、驚くことが起きる。

新たに即位した女王。亡き王の王妃だった女性が歓声に応えて国民の前に姿を現したとき、その傍に侍立する者の1人。それがかつての敵国人、奴だった。

あの森で撃ちつくした銃を振って立ち向かった男に奴は馬上蹴りを

食らわし、その上で飛び降りると押さえ込み、剣を首に擬したものだ。血走り、何か小動物の皮を生剥ぎにしようかというような嗜虐に満ちた目。しかし、奴はふと力を抜いて立ち上がると、やにわに剣先を男の顔の上に走らせた。ひっくり返った彼の目の前で哄笑を残してひずめも高く走り去る奴。男の視界が頭から流れ落ちる血潮に赤く染まった。

それから、何年もたった。奴はこの国で順調に出世の階段を上り、かつての故国にはすこぶる冷淡な態度をとり続けた。そして、この地の知事職を手に入れた。

男の素行の乱れはあるときからだった。不自由な体の退役軍人には職はない。毎晩のように浴びるほどの酒妻との口論、そして…。

この地にやってきたのは偶然だった。挙動不審な退役軍人は首都では目を付けられる。女王自身がそういう輩を唆しただけになおさらだった。

地方ののんびりしたところを。かつての戦友が世話してくれて、残ったわずかな蓄えで小さな農家と自分が食う分の畑を手に入れた。

そう、このままだったら、悶々としたままでもひっそり暮らせただろう。

しかし、ある日の新聞がそれを碎いた。奴がこの地の知事に任命されたという記事とともにあの燃えるような髪と頬髯の奴の写真が載っていた。

戦友に無理をいって、調べてもらった。いよいよ来週、奴はこの地に遊説にやってくるのだ。

近衛師団の参謀長は目の前に立つ部下の姿を上目で見ながら、命令書を読み上げ、そして続けた。

「承知の事と思うが、今回の警護対象にはなかなか難儀なものがある。貴様は、あの方をどう思うか。」

「任務であります。それ以外は考えません。」

「そうか。だが、もし何かがあった場合は、畏れ多くも女王陛下のみ気色に関わろう。たとえ、旧敵国の出身といえどもだ。」

「わかつております。」

「覚悟の程よろしい。」

敬礼すると部下はくるっときれいな回れ右を決め、靴音を鳴らしながら立ち去った。

傍観していた副官が聞いた。

「あの者でいいのです？」

「あれはああ見えて優秀だ。それに身边警護とは身を挺して全うするもの。そう、文字通りの意味でな。士官の1人や2人、替えはいるわ。」

男は、次の朝早く、珍しく衣装を改めて町に出かけ、そこから首都行きの列車に乗った。

中央駅のごった返す雑踏をかき分けて市街に出、繁華街から少し離れた裏町の建物に消えた。それから、遅めの昼飯のために瀟洒な食堂に入り、案内されるまま席に着くと、混んでいることとて、もう1人の男がすまなそうに相席を願い出て、承諾した。なにやら話題を見繕えたようで、しばし和やかに歓談すると、男が先に礼をして出た。

それからまっすぐ駅に向かい、夕刻到着予定の列車に乗り、家路に着いた。

その日は他に何もせずに就寝した。

1週間後、男は再び先日同様の服装で今度は町に向かった。町の広場はもうごった返していた。ちよつとしたお祭り騒ぎの雰囲気だった。

しかし、男はそんな喧騒を尻目に、ある建物の中に入ろうとした。警邏中の巡査が見咎めたが、ここの親戚に用だと笑顔で答える。巡査も不自由そうに引きずる片足を見てそのまま行かせた。

空き家の多いそのアパートの2階を首都であつた男たちは数週間前から借り、カーテンをこぎれいに飾り、あたかも誰かが居住しているかのように細工していた。その広場に面した窓際の部屋にはすでに大きな黒皮のケースが置かれていた。

知事の一行は少し遅れて到着した。

かつて燃え上がるような緋色だった髪や髯は、かなり白いものが混じっていた。

知事は、まず、取り巻きとともに町の顔役連中にこやかに握手を求めて回り、そのたびに二言三言はなしかけた。

旧戦争の勲章をこれ見よがしにつけて見せる老人も多少はいたが、多くは新しい権力者に対して従順なるを示していた。

まず、演台で、恰幅のいいこの町の市長が話し出し、浮ついたような寿ぎと、今後の市の発展に知事を通して国の手厚い支援が得られんようという内容の少々くどい、しかし中身のこれまた薄味の演説をしたが、その間、知事の周囲は何人もの屈強な者たちに取り巻かれた。

男は、知事が、演台に立つのを待った。

腕にはすでに、かつて軍用だった狙撃銃が構えられている。

その多くがパージされた旧王の部下。その1人が国軍の純血派に渡りをつけ、制式から外されたその銃を弾薬とともに持ち出すことに成功した。

ようやく照星の先に奴が現われた。引き金をゆっくりと引き絞る。と、そのとき、知事の顔が大きく揺らいだ。

あわてて望遠を動かして驚愕する彼の視線を追うと、黒いスーツに身を包んだ細身の体がもつとか弱い少女の体に覆いかぶさるうとするとところ。さらに別の一団がもう1人の駆け寄った若い男を拳銃で撃ち倒した瞬間。

いかん。

急いで照準を知事に戻したときには、幾人もの頭の影に覆われて知事は急いで彼のいるアパートの隣に担がれるように運ばれるところ。

制服の警官たちがかわって少女を押さえ込み、若者の力ない体を数人がかりで取り囲んでひきずろうとしたのを見て、わき腹の赤いものを押さえながらその細い黒服は後を追おうとし、その瞬間顔をこちらに向け、立ち止まった。

それは若い女。かつての幼い日の面影、そして、亡き別れた妻から引き継がれた亚麻色の髪。

驚愕に目を見開いた彼女がしかし、懷から拳銃を抜こうとしたのを見た彼は、そのまま引き金に力をこめた。

爆発が起きたのはその瞬間だった。知事がようやくかつぎ込まれたその小さなホテルは警備陣の間では万一の場合の避難場所とひそかに決められていた。しかし、それは事前に漏れていた。

謀略家たちは彼を引き込み、その憤懣とコンプレックスに乗じて知事の狙撃を依頼したが、もとよりそれは知事をその建物に近づける

ための陽動に過ぎなかった。

思わぬアクシデントがあったが、怪我の功名、彼の狙撃なしにうまうまと知事を爆発の巻き込む事に成功したのだった。

使用した爆薬はそれほどではないが、老朽化激しい町並みゆえに、当の建物ばかりか周囲のものもすべて倒壊した。

ほぼ本能と言っている動きで身を伏せた彼女の上を衝撃波が抜け、おかげで、耳やら頭が鳴る中立ち上がったとき見たのは、周囲に転がる瓦礫や肉塊、夥しい粉塵と煙、炎だった。

よろめきながらも油断なく銃を構え、崩れた隣家に近づいた彼女は、人影が壊れたガラクタの中、うずくまっているのを見た。

「おとうさん」

思わずついて出た言葉に我ながら驚きながら、しかし、頭から血を流したその白髪の男の手の先にやはり埃塗れの銃が転がっているのを見た。

彼女は拳銃を構え、その引き金を引いた。

数カ月後のこと、あの日以後空き家になった男の家に、めずらしく客人がやってきて、不在を確認すると鍵を開けた。

その妙齡の婦人は2日ほど滞在して部屋の中をきれいに掃除し、次に町の例の居酒屋に立ち寄った。

店の主人は求めに応じて彼が最後の晩に置いていったロケットを見せてくれた。それは送られた封筒に入ったまま、店の主人に預けられたもの。

おととい部屋を片付けているとき、見つけた手紙。それには、用事があるから今回は会えない、という謝罪の言葉、そして、居酒屋の

主人を訪ねてほしい、そこに行ったらお前にメッセージを預けてあるよ。

万一家が搜索されてもお前に累は及ばさない。

ロケットを開けるとそこには小さなスナップ写真。微笑むカップルと女のほうの抱いたいたいけな幼女。

しばらく握り締め、しずかに瞑目してから彼女は言った。

すみませんが、また預かってください。

実はしばらく首都で一緒に暮らしていたのが、最近急にいなくなつた。

よもやと思い参りました。もし見かけましたら、これをお渡しくださいまし。

萌黄色の封筒にロケットをしまい、改めて丁寧に封をした。

あのあと父は重傷で前後不覚。目を覚ましたときは重度の記憶喪失。口封じに後をつけ、瓦礫の影に潜んでいた陰謀家一味を銃で撃ち、壊れた狙撃銃を彼らに持たせたあとは、父に付き添い、やがて退院したとき、一緒に官舎に引き取ることを申し出た。

それからの日々は、査問の処分の逆に殊勲のとあわただしくもささくれ立つ中で、家に帰ればそれはそれは穏やかな日々。

ところが、ある日、父は忽然と姿を消した。

帰れば、査問処分か、それとも依頼除隊かの2択問題。本当に親子でそっくりだわ。

店を出て、表のコンパチブルの車に乗り込むと、彼女はそれを首都にむかつて走らせる。

うねるような丘陵を秋の少し寒い風が吹き抜ける中、蒼い空がどこまでも続いていた。

交錯

宮殿の謁見の間は、これを設計したお抱え建築家が意図したように、明り取りの多い光に満たされた広間であった。

真紅の絨毯を静かに進むすそ丈の長い後宮女官の礼装のその女は、玉座から5mほど手前で静かに立ち止まり、頭をたれ、身をかがめて礼の姿勢をとった。

「面を上げよ。直答を許す。」低い声が頭上から降る。

女は少し頭をあげ、上目で声の主を視線の端に見、また下げた。

「勿体のうございます。」

へりくだってはいるが、語尾のはっきりした言上が壇上に返ってきた。

中心の玉座に座すほぼ老年に達しつつある、その人物、この帝國に今君臨する皇帝とその隣に座す微笑を絶やさぬ引き締まった容貌の若い男、彼女が今仕えている皇太子が見おろしている。

「もう、気持ちは決まったかい？」皇太子が優しくきいた。

「はい…。かたじけなさに身も震える心地がいたします。」

君主とその長男は満足そうに頷いた。

「あの方が入内されて3年ですか。」

「はや、もうそんなになりますかな。」

「公爵家からの入内、あの当時はその清楚さ、愛らしさ、天使のごとくでございましたな。」

「後宮に入られ、女官長様や第1皇女様から特にお目をかけていたのだいたとか、最近では皇太子殿下お身内の御用はもっぱらあの方が果たされているとか。」

「そう、そう。本来なら、その、お手つきになってもよろしかったのですが…ゴホ。」

「殿下にはそれが、その。まあ、こんなところでは憚られますな。」

「そうそう、壁に耳ありですぞ。あれだけご壮健でいらつしやるのに、神も罪な積み残しをなさる。」

「しかし、不謹慎ながら、幸いなのではないですか？このたびのお話、けっして悪いお話ではありませんまい。」

「いやいや、皇祖御建国のみぎりにそのお馬の轡を持してお仕え以来のお家柄とはいえ、御養女としてお迎えいただけるとはまことに名譽。」

「左様、いずれ他国に嫁がれるとしても、その国のお妃となられるのは明確。うらやましき限りじゃ。」

「しかし、妙な話も聞き及びますな。」「ほう？」

「入内される予定のその朝。双子のご姉妹を急に亡くされたとか。まあ、口さがない雀の囀りですからよいのですが。」

「何かございましたかな。はて、やはり病に罹られていたのに、前夜の御行事に無理を押して出られた故のことと聞き及びますが？」

「夢見がちなお年頃、夜中急に夢魔にとりつかれて、手近な刃物で自分を害されようとなさった。丁度それを見咎めてご姉妹のご乱行を止めようとなさったが、すでに遅かりしとか。」

「さてさて不審。しかし、健気にも甲斐甲斐しくお亡くなりになったご姉妹をわが身に染まるのも省みずに介抱しようとなさったそうで、それゆえ入内されてからも、皇后様はじめ大層お目をおかけになったそうで。」

「いや、ちと長話が過ぎましたな。ほれ、宰相閣下が来られる刻限、あのお方がこんな話を耳にしたらいろいろ難しい。」

「左様ですな。ではのちほど。ブロース産のよい海老が届きましてな。」

「それは楽しみ。いつもの時間によらさせていただきますまいようぞ。」

宮殿内では居室を控えの間呼ぶ。

すでに女官としては若さに関わらず、ある程度の重きをなしていた彼女は、日当たりのよいいくつかの部屋に別れた狭からぬ控えの間

を与えられていた。

重い礼装を普段の執務用の衣服に改めると、彼女は静かに先ほど御殿を辞すときに宮内長官の手を介して下げ渡された大きな菓子容器に触れた。

これはあとで身分の低い童女たちに分けることにしよう。

少したったとき。座ったままの彼女は小さくひとりごちはじめた。風貌が少し変わった。

いつもの明るい小春日和を思わせる目の色が、今はしずかな、しかし伶俐さを思わせる色に。

「おめでとう。姉さま。大変だったけどここまでやっと来れたわね。」

低く細い、か弱さをおぼえるような声。さきほどの謁見の際やこちらの御殿に帰ってからのてきぱきとした口調とはまったく違う抑揚の欠ける口調。

「心配したけど、姉さまの陰日なたのない人柄のおかげよ。人と交わり、その場の空気をとて明るくしてくれる。うらやましかったの。実はすうつと。」

「でもずいぶん危ない橋をわたったわ、何度も何度も。ああいう嫉妬やひねこびた悪意ばかりの人たちってずいぶんいるものね。あの人たちが何かを仕掛けるたび、危ういところでいつも姉さまが頼りにしたのは。」

わたし。」

「いいの。私は姉さまがとっても大好き。この体と一緒に生きていけるのがとても幸せ。いつでも頼って。」

「でも、少し違うのよ。あなたのお話はみんな大好きで、みんなあなたのほうをすぐに向く。皆はとっても好いてくれる。そう思っているのね姉さま。」

「私にとっては、姉さまのは自分のよいところだけ見せる自己宣伝うざいだけだわ。」

だから、そんな姉さまは大っ嫌い。」

急に震えきたように背筋がのびた。

だが再び、おちつく、と同時に目の光が青黒く燃える。

「姉さま、あなたは私、私はあなたよ。死ぬまで…この体がなくなるまで一緒。だから多少軽はずみで思慮の足りないあなたが畏に足を取られないように見ていてあげる。なにしろ、あなたが苦痛と思うものは私も耐え難いもの。」

「勘違いしないでね。あなたと私は同じだけど、あなたを救うのは私の意志よ。だから…。」

髪をほどいた。つややかなウェーブが優しく肩にかかり、額を覆った。

「私を信じなさいね。私のいうことに間違いないんだから。」

「捨てないで。愛しています、お姉さま」

春先の夕暮れ。まだ少しのこる冷気が部屋の中の光度と反比例して忍び込んできていた。

翌月、公爵家令嬢にして皇太子付き女官を養女として迎え、第11皇位継承者となす勅令が發布された。

それから数カ月後、国内の風光明媚な湖水地方にある離宮で皇女は隣国の王太子殿下との謁見を賜る。

その後両国間の種々の懸案を話し合う多忙な外交日程の間を縫って交渉が続けられ、

最終的に両国政府の決定に基づき、皇女の隣国へのお輿入れが決まる。

翌年、隣国王宮にて皇太子、実の親公爵夫妻列席の元、王太子と皇女の婚礼が賑々しく行われた。

新しい王太子妃は笑っていた。それは故国で貴賤問わず多くの人々を魅了した晴れやかな笑顔だった。

かがり火

静かに受話器が置かれた。

背後でだけだるそうな寝返りを打つ衣擦れの音。

まだ、快樂の余韻を楽しむほてった息が残っていた。

今日のところはここまで。そうひとりごとと、静かに寢床に近づいた。

相手の女は長いブルーネットの髪をしとどシートの上に散らせながら、背を向けている。

その脇の大きな目の枕を左手にとり、そして、ふいに女の顔の上にかぶせた。

唐突のことに裸の手足がばたつき、背筋が湾曲して跳ね除けようとする。

右手には黒光る鉄のかたまり。それを枕の上から力づくで押し付け、引き金を引いた。2度引いた。

枕がおとなしくなり、白い手足がだらりと伸びた。その陰のシートに赤いしみが徐々に広がりだした。

王都駐在帝国全権大使は温厚篤実な性格で、誰からも好かれた。だが、その日、そのときはいささかいつもと違うとっつき悪さを周囲の誰もが覚えたであろう。

王国外務省に呼ばれるのは実はそう珍しいことではない。しかし、このとき外務大臣から瀟洒な応接室で切り出された話には、彼ならずとも顔をしかめたことだろう。

帝國と王国の間の交通はこの近年、以前以上にさかんになってきている。陸路、海路、そして最近はやりの空路もますます頻繁になり、旅客人数、輸出入物量ともに増加の一途である。これはひとえに現女王が帝國よりお輿入れして以来の友好関係の賜物である。

当然友好国として、煩雑な出入国手続きは簡素化すべき、となり、現行では空と海はともかく、陸路、特に鉄道においてはかつてのよくな国境検問用の停車場で何時間も検問に時間を費やすことはなくなっていた。それぞれの国土の最終駅で係官が簡単に旅券や通行許可証をチェックする程度。両国間を行き来する国際急行列車はそれがためにますます短時間の運行が可能になって大繁盛であった。

ところがこの日、王国外務省は従来ほとんど放置状態の国境検問用停車場を再稼働させ、検問強化を行うことを特命全権大使閣下を通じて帝国外相閣下に伝える栄を有するものである、と言うのである。

「なぜかつて？そりゃ、治安上の問題で押し切られたさ。」

大使は憮然として大使館地下の電信室へ降りていき、本国外相宛暗号電文作成を指示した。

帝國大学同期ながら彼とは正反対の瞬間湯沸しな外相の反応を思うと気が重い。

3週間後、両国の国境地帯の共同管理地域。王国側から入ってきた線路は一回大きく蛇行し、各々の国境線とは45度の角度で列車が止まるように設営された露天の停車場に急行列車を導いた。

双方からは重機関銃の射程内にびったり納まる場所。各々、警備兵は古い慣例に従い、蛍光塗料を塗布した曳光弾を装填している。王国軍は赤、帝國軍は青。

蒸気を吐き続ける機関車を横目にバス型の車両。王国軍国境警備隊の灰緑色のその車から20人ほどの人影が降り、先頭車両から乗り込んでいく。

その丁度同じとき、線路をはさんで反対側にも最後部車両の脇に同じ車両から同じように兵員が後尾から乗り込む。

帝國側監視ポストからは高倍率の望遠鏡で監視を続けている。銃座砲座には全員がついている。だが、それほどの緊張感はない。レンズを覗き込む若い将校を除いて。

暗緑色の制服に包まれた王国軍指揮官はまず後尾一等車のコンパートメントに入り、個室をひとつずつノックして開けさせ、旅券、通行許可証の提示を丁重に求めている。別の部下たちは食堂車まで進み、ここでは厳かに宣して提示を丁度テーブルについている乗客たちに求めた。

機関車の直後から始まる二等、三等車では少し雰囲気異なった。ごった返した客車の中を無表情な警備兵が進み、提示を求めた書類と持ち主の風体を相互に睨め回した。たまに険しい表情と高圧的な音声が続く。

一方一等車の個室もあと二つというところで、指揮官の女性士官は乗客に微笑みかけた。

「兄妹で旅行？たのしみね。」

「叔父があちらで店を持っていますので、頼ろうと思ってます。」
10代半ばながらしっかりした物腰の少年は答えた。少しウエーブのかかった柔らかそうな髪を少し長めにしている。

「そう、道中気をつけてね。」

向かい合わせに座る妹を見る。少し硬い表情ながらブルーネットのお下げ髪に萌黄色のワンピース。
特に問題はない。

この歳の子供だけで長旅をさせるというのもいかがかと思うが、親によっては自立心涵養と称して一人旅をさせる家庭も多い。中流の上以上の家では流行とも聞く。

2等車を検査した班は三等車に移った。

率いた軍曹は顔をしかめた。えらい臭気である。

二等よりも狭い堅い座席にぎっしりと座った乗客たちは、おしなべて全員貧しい。

ほとんどが国境地帯の出身者で、地方政府により発行された通行証しかもたない。

国境をはさんだ二つの町の間を行き来するのみで、両国の合意によって安い運賃を享受している。

兵は粗末な綿入れ状の上着をまとって震えている彼らから通行証を受け取りチェックしていく。そして、20何人目かで、やはり耳たれの付いた防寒帽を目深に被った男に提示を促した。ところが、その男は身動きしない。眠っているのか。

「おい！」

兵は少し乱暴に肩を突いた。押されると、男は目を閉じたまま反対側にグラリと倒れた。

「班長！！」

若い兵は声を上ずらせて叫ぶ。軍曹は腰のホルスターに手を当てたまま、狭苦しく、客の荷物やら商品やらでこった返す通路を走った。「死んでおります。」

軍曹は別の部下に身振りで指示を飛ばした。

一等車のキャビンにある車内電話機がベルを鳴らした。

兵の1人が受話器を取り上げた。すぐに上官の名を呼ばわった。

丁度最後の個室ではぼチェックと質問も終わったとみなした外国人とおぼしき男性は再び読んでいた本のページに目を落とした。

受話器を受け取った女性士官は指示した。死体を運び出した後、3等車乗客全員を足止めせよ。1等二等乗客にもその場を動かぬようにとの警告を出し、自身は下車して停車場の地下待機室から司令部

に指示を仰いだ。

すぐに別列車を平行線に入れるので、3等乗客とその他でも挙動不審な者はその列車に収容して王国領内に一旦返すべし。

そのときには40名の警備兵のほとんどが3等客車周辺で警戒の態勢をとっていた。

異変は国境の反対側、帝國領でも察知され、こちらの警備隊にも緊張が走っていた。

なんらかの動きありと後方司令部に連絡を入れたあと、地区警備隊長は監視強化を指示、自らは指揮車両にて共同管理区域境界まで壕ひとつのところまで前進した。

すでに日が傾き始めていた。すでに王国軍の車両数台が到着し、列車周辺を昼以上に明るく探照灯で照らし出す準備を整えていた。

国境警備軍の救急車が遺体を収容して去った後、乗客たちは降りるわけも行かず、不安げに車窓から外を覗き込んでいた。

目にするものは共同管理区域の枯れ草の広い草原。ほとんどかなたの帝國領唯一といわれる景勝地である山塊まではさえぎるものがないかのようだった。

二等と1等の間にある食堂車に陣取った女性士官は、遅い昼食代わりの肉の燻製を冷えたお茶をありながら食べていた。部下の兵の中でも交替で休みをとりに来たものがやはり携行食糧を齧っている。もう1人毛色の異なる者たちが2人。帝國軍のオブザーバーとして例の褐色の制服に濃い灰色のこれまた有名な外套を羽織った将校たちだが、こちらは無言でタバコをふかしている。

彼女は今日ほど疲れを覚えたことはない。

以前、近衛師団にいて気を使う要人警護任務に当たっていたときでも、これほどではなかった。もっとも、さる人物の警護に失敗したために、今はこうして辺境の車掌こつこを押し付けられてるのだが、立ち上がると、一等車に入っていた。

ここの乗客たちにはとんだ災難である。比率からいって、帝國、王国それぞれの国籍が半々。いずれも安からざる運賃の負担が出来る階層の人々である。

2つ目の個室のドアが少し開いている。ふと見るではなく部屋の中を見ると、例の少年と目が合った。軽く微笑んできた。だから微笑み返してみた。

後もう少しの辛抱だよ。彼女は心の中でひとりごちた。

そのまま、こつこつと靴音をたてて、また食堂車のほうに舞い戻った。

丁度陽がトツプリ暮れた頃、列車が到着して、停車場ホームの反対側に止まった。今度はディーゼル機関車に押された少し古びた客車だった。

ドアが開けられ、3等客車の客たちは警備兵にせかされるように元の列車から降り、隣の客車に移っていった。

古びてかび臭い陰鬱な車両だった。

大方の乗客が乗り移ったとき、客車の編成の中央部、そして、機関車の連結部付近で破裂音。そして、暗闇の中、たちまち列車の車内を炎が走るのが遠目にも見えたのはそのときだった。

最後の集団がようやく乗り込み、車内がこつた返しているとき、突然熱気とガス、爆風に襲われた人々はたちまちパニックに襲われた。警備兵の静止を振り切り怒涛のようにキルティングの集団があふれ

出した。そして、元の列車に戻ろうとせずに次々とホームから飛び降り、草むらの中を駆け出した。

「発砲しています！」

帝國軍監視壕の兵士が望遠鏡から目を外して上官に叫んだ。

赤い曳光弾が幾筋も見え、やがて鈍い銃撃音。

強い灯の中で人影がもんどりうって倒れていく。

指揮官は有線電話にただちに共同管理地区への介入許可をと叫んだ。

女性士官は煙と光線、においと騒音が交錯する中、走った。

確かに、人影が倒れていた。

随行した軍曹が息を呑んだ。

死んだ男のすぐ後にチェックするはずだった帝國領から来たと思しきみすばらしい姉妹。

いずれも脊髄を一発で撃ちぬかれている。軍曹が声を上げた。

彼女が見返すと、腰のホルスターから拳銃を抜きかけた彼が急に腹を押さえて昏倒した。

その先に見たのは今度はハンチングを被った例の少年、そしてその隣にいる萌黄色のワンピースの少女は、王国軍装備の騎兵銃のうつろな銃口の空洞を彼女に向けていた。

事態の猶予なさを悟った帝國軍指揮官は独断専行を決意し、斥候数名に潜入を指示した。

身を低くして彼らは進む。

そこで、さらに数発の銃声。今度は乱れうちではなく、ほぼ彼らがいる地点めがけて集束してきた。赤い曳光弾。

指揮官の下にそのとき丁度指令が電話で入った。

ただちに列車を接収、帝國臣民を保護せよ。

重機関銃の重い銃声が響き渡った。青白いレーザーが火災の炎とライトの光に浮かび上がった人影めがけて降り注いでいった。少し後方では武装した車両群がエンジン音の唸りをあげて前進を開始していた。

そして、すでに反対方向から現場近くまで接近しつつあった王国軍増援部隊は総員が銃のコッキングを起こしていた。

翌朝、明るい光の中、あちこちであてどなくさまよう人々、くすぶる車両、うめく負傷者、そして物言わぬ死体が転がる中、両軍の停戦執行チームが無言で肩を並べて進んでいった。

中心となる鉄路のうえには、並んで焼け焦げ、炎天下に放り出された2匹の青大将のような列車の残骸があった。1人の女性士官が上着を脱ぎ、白いシャツの上から胸から肩にかけて止血を受けながら担架で運ばれるところだった。

王国軍の参謀が無言でそれを見送る。行方不明者の数は判然としない。混乱状態の中、氏名の控えのある一等乗客すら3割は不明なのだ。リストにある一番年少の兄妹の名を見て、彼はため息をついた。どこにいったのだろうか？

女王は顛末の報告を侍従武官から受けた。外交関係そのものには影響は最小限に止める事ができる模様。なんと言っても、長年の友好関係はとぎらせるわけには行きませぬゆえ。ちかく、謝罪の特使を…

ひと段落着いたところで、次の件を報告させた。

大臣夫人殺害の下手人は未だ判明せず。

年少者、同性愛、いずれについてもよからぬ噂の多いこの貴婦人は、寢床で頭部を撃たれて即死するという無残な最期をとげていた。

1人、その夜呼ばれた少女がいたという噂もあったが捜査当局は残念ながら裏づけが取れていない。

皆を下がらせてから、女王は静かにため息をつく。

そして、

「妹よ。あなたの元気のよいやり方では少し騒々しくてよ。もう少し慎重にせねば。」

ふいに表情が変わる

「姉さま、あの帝國以来のうるさい女は処分のしどころじゃなかったかしら。いろいろ私たちのこと探りを入れて、元女官長の妹というだけで、あわよくばなんとか私たちをあやつろうと、いろいろ不快だったわ。」

「まあ、それはそうだけど。でもあの子たちは無事でよかったわ。」

「そうですね、まだまだ働いてもらわないと。今頃は、ほら、子供のとき女中のメルがよくあの美味しい砂糖菓子を買って帰ってこっさり分けてくれた、ジャンのお店の近所にいるはずだわ。」

「懐かしい……。少し妬けるわね。」

「いろいろ、そう、いろいろ仕事が増えて大変な想いをさせるけれど。2人ならできるわよね。」

女王のひとり言は薄暗い私室の中、まだしばらくは続く。

日々の糧 1

帝都から離れること、数10キロ、近年その路線を延ばしていた民鉄の電車で1時間ほどの郊外の小さな町に、そのパティセリーは店を構えていた。

小都市としては賑わい、建物の込み合った市内からこれまた少し離れた、閑静な緑地を交えたところ。少し裕福な弁護士や経営者などの屋敷が間隔を置いて並び、かというと、昔ながらの農場もその間を埋めるように広がる土地、その少し広い草地に囲まれて、通りに面したパティセリーは、近所ではなかなか評判の店だった。

少し古い、しかしがっしりした石造りの母屋は回りに蔭を絡ませてそこにいつでも、パン焼き釜の煙を吐き出す煙突をたてて、これまた香ばしいパンや溶けたバターの香りを通して人々を誘っている。この地区の住民でここのお世話にならぬ者として無く、女主人と髭の職人は人気者だった。

ただ、あまりにこここの風景になじみこんでいるあまり、彼らがいつここに来て、以前は小さからざる何かの作業場だった建屋をパン屋に仕立てたのか、みな、もう覚えていなかった。

ここ半年、新たに13、4の男の子と女の子（当然姉妹だろうと近所の雀どもはうなずきあった）が加わり、甲斐甲斐しく立ち働いているのが変った点といえば言えるところではあったが。

もう昼近い時間、昼にやってくる客用の様々なパン、ケーキ、クッキー類などの焼き菓子を並べ終わって、奥の厨房は次の仕込みに入っていた。

髭の赤い職人が種を仕込んだパン生地を一心に練っている。

表の店で売り子を任されている女ににこやかに声をかけ、笑顔の返答を受けながら、その少年は厨房に入って、職人にただいまと声をかけた。

「遅かったな。」

「少し立て込んだじゃって。でも、アレフさんには会って来たよ。」

「どうだった？」

「電話で聞いたとおりのを今週中に用意しとくって。あさって荷が入るから、その中から融通できそうだってさ。月曜の昼過ぎにはいつもの通り配達に来るってさ。」

そういつて、肩からかけていたズツクの鞆から一枚の紙を出して見せた。

手を休めずに横目でその紙をしばらく見た彼は、

「奥に持って行ってやんな。向こうが終わったら、ジャムの煮込みを手伝ってくれ。」

「あい。」

少年はそういつと、入り口とは別の壁に向かい、そこにある古ぼけた、しかし重そうな鉄扉をきしみ声をたてて開けた。

その向こうは、この厨房と瓜二つな作業部屋。しかし、こちらはより暗く、湿っぽく、しかも、床は土がむき出しの土間になっていた。職人の親父が向かっているのとはほぼ同じ大きさの作業台の上で、14歳位の女の子がやはり大きな塊をこねていた。しかし、こちらは表の厨房で練られている小麦とバターの塊などではなかった。

むしろ、灰色の粘土のかたまり、といつてよかった。さらに、彼女はそれを、短いひじの高さまで届きそうなゴム製の黒い手袋をしてこねている。

においがまた、パン生地とは違う。ちょうど、何かの香料か何かのような揮発性の甘い香りがとぐろを巻いていた。彼女はその中で、裸電球一個のもとで熱心に打ち込んでいた。

「...どう？」

少女の手が少し緩んだ。

「合図」

小さいが少しぶっきらぼうな答え。

「ああ、すまん。」表のノブの裏を少し押すと、内側で豆球が光るというからくりを思い出した。

特に悪びれもせず、「どう？」再び聞いて今度は顔を手元近くに寄せる。

「あと、30分…」

「うん、そうだね。まだ、粒子が見える。」

「アレはできた。」

机の片方の恥には黒い小箱が二つ。

「来るのはどうせまだ先だから、おちついてやるといいよ。」

少年は少女に言い置くと部屋を出て行った。

少女は少し小首を傾げてからまた目の前の塊に顔を向けた。

別に不審があるわけではなく、これは癖である。

次に向かったのは、厨房のそのまた奥、食堂兼居間の奥の階段を上った日当たりのよい部屋だった。

小さなテーブルが2つに椅子が二つ。細表の穏やかそうな笑顔の女は目を細めて言った。

「あ、おかえり。」

「書類、ここに置いとくね。レシートも注文書も入ってるから。」

「遠くまで行ってくれてありがとう。アレフさん元気？」

「元気です。…新しい人雇ったみたいで、その人が今日遅く来るみたい。」

「まあ、そうなの。ところで、少し手伝ってほしいのね。」

少年の顔から少しばかり血が引いた。

「先月の経費がね、少しレシートも込み入ってるみたいで、読み上げ、手伝ってね？小一時間。」

女主人の目はますます細まり、ますます微笑みは深くなった。

彼はそつとため息をつき、たぶん本日もっとも長く感じるであろう一時間を過ごすために彼女の隣に座った。」

一方、奥のそのまた奥の作業場では、髭の職人が少女の手元を見つめていた。

「いいか、根つめて張り切ったからっていい仕事はできるわけじゃねえ。適度に力抜け。休みを挟むつてのは悪い考えじゃない、むしろ利口なやり方だ。」

「ありがとう……でももう終わるから。」

たしかにすっかり捏ねられた塊は均質なものになっていた。

親方は検分すると、彼女に言った。

「よし、いいできばえだ。型にあわせて切って包みな。」

彼女の顔にそのとき初めてわずかだが笑みが浮かんた。

古ぼけた小型の貨物車は帝都の運輸局発行のナンバープレートだったが、プレートだけは昨日別のところで用立てられたものだった。材料の鉄板は実は新しいものだったが、軽くさびて古ぼけて見させる細工にかけては長けた者たちも世の中にはいる。彼らの腕を知りたければ、多少弾めばよい。

その貨物車は駅のそばを通る街道を少し行つたところで降り、田園を抜けて市街に入った。

運転席の女は少し深めに作業帽をかぶっているが、刈り取った栗色の髪の毛の端が窓から入る初夏の風になびいていた。

この受け取りの仕事だけは他には任せるわけにはいかなかった。

貨物車は何もかもがのんびりとした風景の中、向こうに見えるパティセリーの石の建屋に向かつていた。

日々の糧 2

少女は最後の仕上げにかかっていた。

練り上げた塊をはかりに載せ、ほぼ、5等分の大きさにちぎる。それをさらに伸ばし、3センチ角くらいの角材状の長さ15センチの塊に切り分ける。

切りあまりをさらに練って、同じ塊にする、この作業を繰り返し、全部で20本ほどの棒状の物を並べた。

つぎに、内側にパラフィン紙を敷きつめた木の箱にこの塊を4本ずつすっぽり収め、最後に蓋をして、紙製の粘着テープで封をした。5個の箱をこぎれいなポピーの花模様の化粧紙で丁寧にくるむと、さきほど兄に指し示したこれより小ぶりの黒いケースをやはり余った化粧紙にくるみ、最後に大き目のボール紙のケースに全てを収め、キャンバス製の厚いベルトで括った。

やはり本来の仕事を仕上げるのは気持ちがいい。

年端やあどけなさの残る顔立ちに似合わぬそんなことを思っ少しタオルで顔をぬぐっていると、鉄扉の内側の豆球のシグナルが光った。

店番のおねえさんは笑顔で迎えてくれた。

少しくたびれた感じの作業服、太目のサスペンダー姿のしかし小柄な女は、帽子を脱ぎ、会釈してから名を告げた。

店番は少し奥に行ってまた戻り、今度は店の女主人を連れてきた。

「ご連絡いただいた方？アレフ商会のほうからも電話が来てますわ。」

女主人は柔らかな声で答えた。

女は封筒を相手に差し出した。

茶色の少しくたびれた便箋が出てきた。目を走らせる。

ついで、微笑みながら、

「今、お出しますわ。どうぞ、少しそここでお待ちくださいね。」
促された先には、丁度ショウケースや何種類ものパンや菓子、そして瓶詰めものの置かれた棚、さらに奥に、こじんまりと、数脚の円卓と椅子があった。

ここではお客が店で買ったパンや菓子をそこで賞味できるようになっているらしい。当然、お茶なども出すのだらう。

「では甘えて。」

作業服の女は少しはにかみながら一番手前の椅子に腰を下ろした。
と、少し気が緩んだか、手に持った書類ケースから、何枚かの小さな紙片がふわっと舞って床を滑った。

「あ、いけない。」

女はあわてて腰をかがめた。紙片のひとつは、ショウケースの下に滑り込む。

幸い、手を入れれば取れる場所だ。すみませんすみませんと言いながら、女は棚の下に手を入れた。

主人と店番は心配そうに上から覗き、「これ、お貸ししましょうか？」一挿しのケージを差し出した。

お礼とともに受け取り、彼女はすーっとゲージを水平に引き、紙片を手繰り寄せた。

丁度、奥の部屋から、小柄な人影が出てきて、そのまま別の入り口から厨房へと消えていく。ハンチングを片手に持ったその細い影を視界の隅におぼろげにとどめながら、彼女は立ち上がった。

厨房の中で、髭だらけの親方はさっき少女が一番奥の作業場で用意していた包みを手にしていた。

「僕が持っていこう？」

親父は振り返って

「いや、俺が持っていこう。お前はそっちのをやんな。」

顔をすつと向けた先には大鍋と中でシロップに浮かんで煮え始めた

果実。

「はいはい。」「一回でいい」

親父は目はそのまま、だが、少し口をゆがめて、包みを両手で持ち上げ、店に出た。

「お待ちどう様。重いですよ？」

大丈夫ですと言うと作業服の女は包みを細腕で抱え上げ、会釈しながら店の外に出た。

トラックはさっきの位置に止まり、しかし、運転台にはもう一つの人影が見えていた。

二台の幌をかきあげると、その包みを彼女は大きめの木のケースにすっぽり収め、これまた木製のふたをし、鉄製のラッチで留めた。

助手席に戻ると運転手の男に声をかけた。

「出して。」

若い女性としては珍しいことだが、その響きは人に何かを命ずるこ
とになれた口調。

はい、と短く答えると運転手はエンジンを回した。店の前で1回切り返してから、そこから離れるトラック。

店の区画を一回りして、街道に通じる道に入ったとき、女は思わず何かを感じて見返した。しかし、そこには何もいない。

店の外に出て、土埃とともに遠ざかるトラックを見つめていたのは、おさげ髪少女。その目には特段の色は無い。

少年が現れ、すぐわきに立ち、肩に手を軽く添える。

「あの、ときの。」

「そうよ、列車であつたわ。」

「あるとき、急所を撃つてれば」
ふっと顔を背けて「その必要はなかったわ。」

「厄介じゃないかい？これからいろいろと。」
「あら、むしろ好都合よ。」

少女はそのまま、入り口に向かう。

「次は本命だわ。急ぎましょう。」

「ああ、あれこそ、待望の一品だからね。」

「妙な具合ですな。」髭の職人はつぶやいた。

「びつくりだわ、あなたがそんなこと言うなんて。」

女主人は柔らかな笑みをそのまま絶やさずに少しからかい口調で答えた。

10代の頃からよんどころない理由でこの武器商売と言う道に踏み出して、幾星霜、すでに年齢と女性と言うギャップを乗り越えてこの商売では知らぬものとして無いところまでたどり着いていた。

職人も最初は彼女にてほとき、やがて、その下につくようになって長い。それを潔しとさせるだけの実績と何かが彼女にはある。

「王国軍の出先がこの帝國で必要なものを調達。それはわかります。しかし、特注の『商品』をカスタムメイド。しかも、この帝國領内で使用するかもしれない。不味くないですか？」

「帝國軍と治安省にはすでに手を打ってあるわ。むしろ、このまま泳がせ、ますます信頼させろ、という指示が来ているの。もちろん私は面白く無いわ。」

職人の灰色の目をじっと見上げた。

「彼らはだまって応じろと言った。今日のことも含めて、取引につ

いてはすでに軍は把握しているはず。何もこちらはずむじを曲げる必要も無い。」

ふと肩をすくめた。

「それに、忘れたの？ 私たちにとってのまず信用すべきは」

「払ってくれる相手。神への祈りはその後で。」

二人は静かに、しかし声をだして少し、笑った。

「そう、あの子達もそれは同じね。」

田舎道を揺られながら、作業服の女はため息をついた。ただでさえ、疫病神のように帝都駐在の王国軍武官には扱われているのだ。いわゆる諜報活動について、こそ泥か何かの類のように考えている彼は、御難続きで近衛師団の新任士官から急降下、ついにこの隣国でスパイごっこをしに来たと思しき女性将校を押し付けられたのを怒りの対象にこそすれども、けしてその困難な任務に理解を示したことなく無い。

だから、こんな闇商人じみたことをしているなどとは報告はできなかった。

幸い、本国の情報部からは担当作戦の詳細については直に本国の情報部長に報告、武官室には一言も入れる要なしと指示されていた。だがしかし、これがますます武官の敵愾心をあおったのもまた事実である。

いやなことを振り払おうと、またべつのことを考えた。さきほどの気配。たしか子供のような影も見たように思える。

多少、子供に対して神経過敏か。

なにせ、彼女は最初の身辺警護、そして国境警備隊において巻き込まれた事件でも、子供、に酷い目に合わされた。

今でも、あの照明弾のきらめきの中、叢で向けられた死んだ目のような銃口、負けずにうつろな目つきのハンチングの少年、そして、

その銃を小柄ながら手馴れて保持した少女を忘れることなど出来るわけは無い。

帝都に届いた荷物は、武官がギヤーギヤー言うのを尻目に彼女によって外交行李扱いになって、その週のうちには、王国首都に届けられた。

それはそれから、郊外にあるさる研究施設に送られ、中の小分けの塊と信管に分類され、都合何週間かにわたる試験に使われた。

実験によりすべての試験データが出揃った段階で、その研究員たちは、今回のサンプルが充分なスペックをもつものと結論付けた。

早急に王国軍情報部は帝都駐在の情報アタッシェに指示、彼女にまたもや任務を発令することになるのであった。

灼熱連鎖 1

その奇妙な建物が町から外れた針葉樹の森の中に出来上がったのは、丁度新女王が即位してから1年半後のことだった。

地方の寂れた、何の変哲も無い田舎町。とりたてて特産物が採れるでなし、ごくごく平凡な、要するに貧乏な土地に、ある日、唐突に建築景気が舞い降りた。

まず、それまでは市の外縁部を丁度、子供の下膨れの顔をなで上げるかのように走っていた鉄道が拡充された。従来の単線が複線となり、線路の脇に頑丈な鉄柱が数メートル間隔でしつらわれ、架線が曳かれ、折りたたみ式のパンタグラフを揺らせ、時折そこからスパークを発しながら電気機関車が疾駆した。

次に市の郊外の空き地が造成され、そこに子供が束ねたパスタをいたずらで散らばらせたように、線路が何本も複雑に組み合わさった操車場が出来上がった。

次にそこから一本の線路が森の中、奥へ奥へと伸びていき、最後に丁度頃合よし、と言わんばかりに、台地上の緑の海に伐採の音が響いた。

その台地は結構な面積があり、なにぶん誰も住んではいなかったのだが、森の動物や鳥を追い払うと、そこに見る見る資材が運び込まれ、倉庫、事務所、宿舍、そして、学校、やがてはちよつとした商店街まで作り上げられた。ただし、そんなことに目を回していた地元の人々も、高い、5mはあるコンクリートの塀に囲まれた、最大の面積を誇る区画になにやらコンクリートの無愛想な構造物がいくつも作られたのはさらに圧倒された。

大きな丸い、見上げるように高い筒状のマグカップを逆さにしたようなものを脇に従えた、特に巨大なビルを人々はいつとはなしに「

城病院」と呼び習わしていた。

それまで一番大きな市内の建物が旧市街を囲む城壁の一部を利用した県営の病院であったのだが、その建物はそれをはるかに凌駕するものだったのだ。

もちろん、これだけの大工事、しかも多大の費用を要するものだけに、地元経済への波及も、それなりにあった。建築のために集まってきた労務者、彼らが去った後、輪をかけて住み込んできた、その施設で職を得るこれまた大量の人々のおかげで、ふもとの旧市もまた活気付いた。

だが、旧市民たちを戸惑わせた一番のものは、実は、新住民たちだった。何も、打ち解けないわけでもない。旧市民とて、他の田舎より偏屈なわけではない。そして、全国津々浦々からやってきたという新住民たちはおおむね気さくだった。

しかし、ひとつとても気になることがある。

彼らは自分の職について聞かれると押しなべて張り付いたような笑みを浮かべながら押し黙る。そして、その家族も、何も知らぬかのようにであった。

いや、実際知らなかったのだ。

そんな人工的なよそよそしさと、田舎の新興都市らしい猥雑さ、相変わらず昨日も今日も明日も変わるまいと言う確信の元に生きる地元民たちの繰り広げる日々の暮らしが3年たち、例の施設の高い丸い構造物の上から白い湯気が時折見えるようになってきた、ある日、地元の病院の院長はある異常に気が付いた。

台地の団地以外にも実に多くの新住民が旧市街にも住み込んでいる。

それだけ住宅需要は旺盛だったのだ。だが、最近、頻繁に彼らが訴える異常があった。

体がだるい、下痢、場合によって不定期な微熱。それほど重い症状ではない。しかし、旧市民でも、仕事の都合上、上の施設に行く機会の多い者たちにも共通の症状が見え始めていた。

院長は台地の施設に付属する診療所を訪れ、所長に聞いたですことにした。

付属の診療所は、しかし、院長が驚嘆するほどの大きさだった。そして、県都にある大病院以上の最新設備が完備されたものだった。ところが院長が2重に戸惑うのは、その所長（年恰好はほぼ彼と同じ）がほとんど取り付くしまの無いことだった。

風土病、環境変化、気候。彼が挙げた原因はまったく院長の納得できぬものだった。

県庁に行って仔細を報告し、検査官を呼ぶ、と叫ぶ院長に、所長は静かに「そうですか」とのみ言い、丁重に彼を見送った。

翌日、院長は県都に向かう列車の車中であつた。電気式の旅客車は今までよりもなんら脈絡もなく動き出すので、少し薄気味悪かった。車窓から、あの施設の近傍にさらに造成がなされ、何かが建てられているのが目に入った。青さがまぶしい山腹がいくつも灰色に削られ、痛々しく地肌を曝していた。

操車場を抜けると、そこでも草原を切り開いて、飛行場の倉庫や櫓のような管制塔が出来上がりつつあった。さつそく気の早いことに王国空軍所属と思しき双発のずんぐりした機影がプロペラを回している。

疲れた院長は静かに目を閉じ、そして、県都の駅に着くまで少し眠った。

がたん、と振動とともに列車が止まり、周りの乗客が次々降り始め

ているのに気がついて、彼は立ち上がり、出口に向かった。まだ少し早い時間の駅のホームはかしこった返していた。

院長の消息が確認されたのはここまでだった。
これ以後旧市で彼を見た者は一人もない。

翌週、旧市の県営病院の院長室には、若い医師の姿があった。メガネをかけた彼は、上の施設の付属診療所から配置換えでやってきたと言う。

新しい院長は若いくせに優秀だと言う評判が立った。おまけに愛想がいい。

前の院長は多少気難しいところもあり、院内、そして市庁でも少し敬遠される傾向にあったから尚更だった。

言っていることは確かによかったんだがね、あの先生は、というのが市長を含めてもっぱらの評判だったのだ。

新院長はさつそく、市民全員の健康診断を提案、市内の病院であふれる分は、山腹に新しく出来た診療所で無条件で引き受けますよ、と確約して皆を喜ばせた。

早速大々的に検診が始まり、各医療機関の門前は列を成す市民でこった返した。学童や生徒はまず、集団で診療所にバスで運ばれ、効率よく検診を受けさせられた。

妊婦、乳幼児は特に優先されたが、実は内々にそれ以上に山腹の施設のある区画に一定距離まで近づいたと見られる者は男女の別なく最優先で検診対象とされ、さらにさりげなく定期的に来るようにと促された。

市内の病院にいるある医師は、少し考えるところがあった。市内で実施した検診についても、そのカルテは一度すべて診療所に渡され

るとこちなっていた。かれのところには掛かりつけで来る患者の幾人かは、施設のほうに仕事に行くのだが、最近愁訴を訴えることが増えていた。彼としては責任をもってカルテを手元で管理したいのだが、それは県からの指示を盾に断られた。何回かかけあつてようやく数人分をコピーしながら返還してもらった。もちろん、データについては必要なときに迅速に知らせる体制になつてゐるから問題ない。若い院長の笑顔を信じるしかなかった。

だが、最近気がついたことがある。血液検査の項目のいくつかは、返還コピーには記載されていないことを。

彼は、しかし、今まで億劫がつてきちんとした定期的な診察に応じなかった市民たちが曲がりなりにも全員足を運んでくれるようになつて、少しうれしくもあつたので、心の片隅にわき始めた暗いものを意図的に見ないようにしようと努めた。

そのころ、そことはまったくの別天地で、件の医師とは別の意味でこの地方の変貌を憂慮の色を濃くしながら見てゐる人物がいた。

彼は医者でもなければ、およそ理系学問については専門的な教育は受けたことすらなかった。

しかし、彼には、妙にカンが鋭いところがあり、それゆえ、幾たびか、危地を乗り越えてきてすらいた。

伯爵家の長男として生を受け、長じては立憲君主制における欽定議會で生き馬の目を抜く闘争に勝ち抜いて、今、彼はこの帝國の宰相に地位にゐる。

だが、まず一目見て、彼の年恰好から見ても、とてもそんな修羅場をくぐつた老獪な政治家の面は見られまい。年齢は30台、いやもう少し若いと見られてもおかしくなかつた。

ウェーブのかかった黒髪を少し長めにし、長身を長めの上着でいつもきちんとするんだ彼は、皇帝、皇太子に対しても常に忠実だつた。おちついた声、決して居丈高さを感じさせぬ語り口は下院議員時代

に投票して以来、支持者たちにとっては無条件で国政を任せるに足る、と思われた。いや、女性の多くには、そんな勿体をつけた理屈以前の好感をいだ貸せるものがあつたのも確かだが。

その宰相である彼の元に今朝届いた報告書一通が少し口の端を歪ませた。

デスクの前に侍立するほぼ年恰好の同じ秘書官に言う。

「王都のトリストラム機関からだ。国防省とは別ルートで派遣して探らせていたのだが、少しひっかかることが起きている。」

「トリストラム卿には、王宮の特に女王政務内庁の情報を探るよう指示を出しておりますが。」

「侍従武官の1人がここ1週間ほど、北部方面に出張旅行中だ。はじめは普通に視察旅行と彼も思っていたようだが、ある場所に逗留したまま動かない。」

「どこでしょうか？北方にはあの場所以外には…。もしや、そこでしょうか？」

「まさに君の言うそこだよ。」

立ち上がると宰相は自らキャビネットに赴き、薄青いカップにポットから熱いお茶を入れ、白い塊を2つ、そして、強い蒸留酒のボトルから数滴をその中に落とした。

秘書官のほうをちらつと見る。彼のほうは少し肩をすくめる。このへんの呼吸は長い間に出来上がっている。

カップをデスクに置いた彼はスプーンでかき混ぜ始めた。

「もし、私たちの推測が正しければ、この間聴いた話もそのまま放置と言うわけにはいかないな。」

その前の週、彼は定期閣議の終了後、1人の人物を呼んで、全員の前でレクチャーを請うた。

物質とはすべからず粒子で出来ており、その粒子もさらに小さな要素が引き合いつながり、反発する振る舞いをなすことで成り立っている。もし、何らかのエネルギーでその絆を断ち切り、粒子の崩壊

を招くことが出来たら、飛び出した要素によって丁度玉突きのように次々と粒子は分解していく。そのとき発生する熱と破壊力は比較するものとして無い…

概略そのような話を、しかし、大臣たちの多くは、それこそ、陸海軍大臣まで含めて半ば白河夜船で聞いていた。

「しかし、あれはまだ理論で証明されたまでの段階。実際に実験するには、と、教授も言っていましたよ。」

「君、私はね。」

かき混ぜる速度を少し緩めて、宰相は顔を上げた。

「時には超常的なことも信じなきゃならんのかとも思う。それに、あれが実現するまでのネックと言うのは、大方資金や材料と言った物理的な課題のみがハードルになっているに過ぎないのが現代の状態じゃないかと思う。これは教授の話を聴きながら気がついたことだがね。」

「つまり、今からでもすぐにできるとでも？」

「さあ、確かにいろいろ難しいところも多かるうよ。しかし、王国の一連の動きにはひよつとすると違つかもしれんが、いやな関わりみたいなものがあるように思えてね。可能性のあることについてはすべて真剣に知恵を傾ける。これが今の私の仕事なんだよ。」

「そつえば、帝都にいる王国のネズミたちにも少し。」

「ほう、何かね」

「大使館付き武官とは別ルートのようなのですが、王国のエージェントがいろいろ国内で調達をしていると。」

「それは、君が言っていた、小さな仲間たちからのものかね？」

「それ以外に、王国エージェントをマンツーマンでチェックしている公安本部からの報告もあります… 先日彼らに接触しかけたようです。」

宰相の手はすでに止まり、カップのお茶は冷め始めている。

「あの子たちには、いつも面倒ばかりをおしつけるなあ。いや、この間の女王からの内々の依頼も最初は断ることも出来たのだがね。」

「むしろ、幸いでしょう、彼らには。あくまで依頼で動くプロです。年恰好にだまされてはなりません。属領上がりの者たちです。」

宰相はまだ、しばらく無言でいた。

だが、やがて立ち上がると、秘書官に先日の教授に再度コンタクトをとり、国防省、参謀本部と面会させるようにと指示した。

「陛下と殿下には私から奏上しよう。少し込み入った話になるかな、今日は。」

官邸の玄関で専用車に乗り込んだ宰相はひとりごちた。

「もし、あの方がそれを手にしたら、あの方を含めてすべてが変わる。」

前席の秘書官が振り返った。軽く微笑み返して

「彼女が望もうと望まないとに関らずだが。」

車は皇宮への長い道に入っただけだった。

灼熱連鎖2

その晩、兄は重苦しさを覚えて目を覚ました。

目の前にある何か。それが見慣れた顔の形に暗い部屋の中で網膜に像を結ぶまで数秒かった。

とてつもなく長く感じられる数秒。

「な、なんだよ！」

彼は自分の顔の上にのしかかるように見下ろしている妹のきよとんとした目をみて叫んだ。

「ロキ、教えろって言った。できたら、すぐ。」

そのままの姿勢、格好で、妹は兄に抑揚の無い例の口調で告げた。起き上がった兄はぜんまい式の置き時計を見つめた。

朝の3時。

欠伸とため息を同時に吐き出しながら、寢床からおり、いつもの服に着替えると、暗い階段を降り、これまた洞穴のような厨房を抜けると奥の作業場へと足を踏み入れた。

半地下式の部屋の電源を入れる。裸電球が灯った。

作業台の上には、不可思議な物体が2組載せられていた。

両方とも、ふた抱えもあるほどの大きな球体。色は灰色の粘土のよくな表面。そして、丁度最近この国で盛んになった球技で使われるボールの表面のような継ぎ目の溝が見える。

継ぎ目で分けられた各々の粘土の切片には中央に一つづつ黒い塊が刺さり、その天辺からは紅白青黄のリード線が延び、まとめられてすべてその球体の土台である金属製のバイブ構造の下にあるこれまた真っ黒く、鈍く光る鉄の箱に空いた穴に吸い込まれている。

「これが、そうなのか？」

兄妹のうしろから声がした。振り向くと、そこには、店の女オーナー

―と職人が立っていた。

妹はこっくりうなずく。

「よく判らないけど、新型の機雷、じゃないわよね？」

機雷にしては不思議な形。

「爆風は外には向いてない。」妹が言った。

「これはあくまで、依頼されたものを作ったまで。爆薬は有機系の薬品に酸を反応させたもの。この間列車で使い、先週王国のエンジンに卸したもののよりも純度も含めて強力。通常のものにくらべて轟爆力はほぼ5倍。これをこの粘土のような決着剤の裏側の鋼鉄製の反射板によって、爆破のエネルギーがすべてこの球の中心に集中するように作った。点火0.2秒後に……」

「あ、あ。わかったよ。うん。」兄があわててさえぎった。

「依頼だとこの中にすっぽり納まる球があるらしいんだ。それを急に圧縮させて新しい合金を作るとか何とか言ってたよ。」

「何かを破壊する、と言う用途ではなさそうね。でもそれにしても爆薬が強力すぎる。ニアが聞いた通りとしてはねえ。」妹のほうを女主人は見る。

「実験はしてないが、スペック的には問題ないはず。爆薬自体は爆破実験の実績もある。」

「いや、俺が気にしてるのは、こいつの注文主のことさ。」

あごの髭をさすりながら職人はつぶやくように言った。

「日にちはたがえども、ほぼおなじスペックのしろものを、まったく2つの方向から注文てえのが、どうもひっかかってな。」

「片方は、アレフの線から来た。これは帝国政府の線。もう一つの線がねえ。」

女主人が考え込む。

「先週も来た王国の情報部の女だね、この注文を持ち込んできたのは。最初はどうも垢抜けなくて、外地に潜るタイプには不向きだから、子供使い代わりかと思っただけど、そうじゃない。」

女主人にとって、相手の人相風体、バックも大事だが、まず、持ち

込んできた話で大概の相手を読み取るのは簡単だった。話の最中のほんの些細な振る舞い、表情が相手の語られざる何かを雄弁に語る、というのが彼女の信条だ。同じ依頼がバッティングするが、断るべきではない。彼女はそう判断した。

当然帝國軍には相談した。返ってきた答えは、そのまま依頼主に沿うようにせよ、だった。ただし、そのとき、ほんのピンの引つかかりのような違和感があつた。話をした軍のエージェントも、自分のなした依頼についてはあまり情報を渡されていなかったらしい。

結局、しかし、彼らはそのまったく重複する2つのオーダーをこなし、両方ともそれぞれ引き渡すことにした。やはり、なんでもこなせる、という評判は貴重である。それに、双方とも注文代金はバカにならなかった。手付けです、といって王国側の女が置いていった額もこの手の仕事にしては異例な金額だった。

「あのさ、」少年のほうが少しおずおずと聞いた。

「ちよつと提案なんだけどさ、これを3組作って、1組持つておくつてのはどうかな。」

女の眉が曇るのを見て少年は口をにこらせた。

「いや、いいかもしれん。」職人が口を開いた。

「今のところこいつを作るのはニアだけだ。つまり、どちらかが都合が悪くなつたとしたら、真っ先に狙われるのはお前ら兄妹だ。」

「だったら余計危ないじゃないか、そんなもの。」

「だから、あることをかぎつける形に両方に情報を流せばいいんだ。そうすれば、いずれにせよ、反対側はそれを阻止に動くに違いない。どうせうまくいくような物なら、次の発注、ついでに改良がつてこれにもなるんじゃないかい。」

「最大の技術情報は、爆破切片を均等かつ完全な球体に並べること、そして、電気式信管をほとんどコンマ8桁近い時差でほとんど同時に作動させる回路の設計。このノウハウを帝國も王国もまだつかん

でいい。」

「なるほど、いずれのせよあんたたちがいないと困ると。」
兄はうなずいた。

「なら、少し、工期を延ばしたことにしよう。アレフもあの王国女も足止めしとかないと。」

女主人は、しかし、得心の行かぬ顔を背けた。

少し、彼方から明かりの気配がしてきた。

「狙われるね、これから。」

「狙われるね、皆から」

二人は向き合い、お互いの手を取りながら言い合った。

「でも、このまま言われるままにニコニコ仕事をしていたら、ますます大変だよ。」

「うん。」

「不安かい？」

「少し。」

夜明け前の冷えた空気が二人の頬をなぶっていく。

「ニア、兄さんを信じてくれ。必ずお前を守る。」

「……！」

「とにかく、これからは僕の行ったとおりにしてくれ。そうすれば必ず生き延びることが出来る。」

「大丈夫。かならずロキのためになんでもするわ。」

兄が暗がりの中で微笑んだのがわかった。

妹の両の目がじっと見つめているのは痛いほどわかった。

二人の上を夜が遠ざかりつつあった。

窓から見つめる二組の目。

「あの方の考えなんでしょうけど、よく判らないことがあるわ。」

灼熱連鎖3

「実は抽出は、ほぼ完了しております。」

「数量はどうなんだい？」

「ほぼ今のところは2個分に相当する量です。今建設中のプラントが完成の暁には年産30個分か。」

「より大型なものを作れるんだろうね？威力をより増大させて。」

「いささか、閣下、それには限界が。ただ大きくすればよいというものではなく。」

「前に聞いたが、工夫が要るそうだな。」

「はい、中心は今の型でよいのですが、それを起爆剤に使います。それを反応させて、より強力な力を。ただ、さらにこの材料に工夫が。」

「なにかね、何をつかうのかね？」

「…重水素です。重水を原料にいたします。」

「水、とわね。とにかくプランを作って提出してくれ。場合によっては機密費を動かさねばならないからね。」

大きく玄関前のロータリーを回りながら博士の乗った車が去るのを眺め、宰相は傍らの男に言う。

「ここまでできたならば、少し勝手に動いた参謀本部を。こらしめんとな。」

「判っておられたんですか？」

「ああ。あの連中にはほぼ時を同じくしてまったく同じ依頼がしかも別方向から来たんだ。詳細はすぐに聞き出したよ。」

「泳がせて…」

宰相は腰を下ろした

「私たちの知らないところで何かを画策していると言ったことだよ。聞いただろ？博士もてつきり御国のためと思い込んでやっていた。」

根は深いよ、まったく。」

「まったく我々にも極秘で王国と我国の連中が地下で新兵器開発で連絡するとは。しかも、それぞれが蛸の手足の先で、お互いが何をしているのか知らない、ですか。」

「それがたまたま今回、あのパン屋にノコノコ双方が出かけたためにその一端がわかった。まったくこれをコントと言わずしてどういうんだね。」

乾燥したさわやかな風が新緑を抜けて部屋に吹き込んだ。

「しかし、これで判ってきたな。やはり、あのお方だ。」

「まだ、我国の各所にコネをお持ちですしね。」

「コネどころか。女官時代からの結びつき、ご実家の声望、それに、あの事件での闇の関係……。我々も常にあの方の息のかかった人物と顔を突き合わさねばならん。心しないかね。」

秘書官はため息をついた。

「いかがしますか？起爆装置とあの者たちの身柄を確保しますか？」

「いや、それはやめておこう。とりあえずあの連中はこの件に関しては中立だ。それに、どちらか積極的に動いたほうが負けだよ、このゲームは。」

「信用しているのですか？」

「少なくとも、奸智と実力は評価できるよ。今頃必死になって、出上がった製品を前に思案をしていることだろう。むしろおとなしく決められたとおりに取引してやるんだな。」

それに、先に実力行使に、わが軍、王国いずれかが出ても、こちらのものだ。」

「二君にまみえる不埒者も炙り出せますね。」

宰相は傍らから少し厚めの本を取り上げ、開いた。

「本当に、なんと未練なお方だ。」

「陛下、王都よりの報告が。」

少し早めに夏の離宮にやってきた女王はこざっぱりした部屋着に換えて、やはり厚めの本に目を通していた。

「なんです。」

「“薪”の入手が少し遅延するとの特情部よりの報告です。」

「どれくらいになります?」

「2週間ほどとか」

「いたしかたなかるう。…研究のほうは順調ですか?」

「今頃は丁度2個目の抽出にかかっている頃かと。」

「実験施設のほうは?」

「受け入れ準備は整いました。」

「まあ、“薪”が届かぬのでは致し方なかるう。…もうひとつやり方があつたげに聞くが、そちらのほうはたれか取り組んでおるのか?」

「目下ほぼこちらのほうが完成には近そうだと。」

「伝えなさい。最初の一個は“、薪”ではなく、そちらを優先、と。」

「御意。」

「まだ何かあるか?」

「帝國宰相閣下から一度御謁見を賜りたしと。とりたてて火急な用件はなければ、帝國領の避暑地の御用邸で積もるお話などと皇帝陛下も申されているとのこと。」

ふっと笑みがこぼれる。

「いいでしょう。宮内官に相談して日程などを頼みます。」

「御意」

「喰えないお人。けっこうお人よしのくせに。」

パン屋の電話が鳴った。

アレフからだった。品物を10日後引き取りに行く。それ以上は待てない、と言う内容だった。

トラヴィアータ1

木漏れ日が少し目にまぶしい。ゴーグル越しでもそうなのだ。

ライダーはその名の通り、皮のヘルメットにゴーグルをかぶり、厚めのデニムのつなぎの袖をたくし上げて、スロットルを吹かした。もうそろそろ、プラグをみたほうがいいな。吹き上がりの騒音の中にしかめつづらがましい濁音を聞きながら彼は思った。

まあ、いいさ。次の町に行けば整備が出来る。給油施設がある場所では大概修理用の部品もあるものだ。こういうとき軍払い下げの側車は助かる。なにせ、国中で一番オーソドックスなパーツしか使っていないのだから。

林道の中を風を切って走る。大きな目のサドルの後ろにもう一つサドルがあり、その両脇には膨れ上がった皮のケースが2つ。上にはこれまた丸々と丸めた毛布やら寝袋やらが縛り付けられている。

側車の方にはやはり皮製のケース、後ろにはスペアのホイール、そしてステアリングの脇にはこれまたカンバス製の細長いケース。

車自体はなんとも珍妙な色をしている。全体を帝國軍公式の濃い緑に、しかし、あちこちこすれたような黄色や黒の帯やら幾何模様が塗りつけられている。それも刷毛目で。

彼が入手した頃からこうなので、たぶん軍でもこんなヌリだったのだろう。さすがに彼も最初は引いたが、調子だけは同時に出た品の中では最高だった。

名前は「トラヴィアータ」。「しきたりや定めに逆らう女性」ようにするにアバズレということだ。

トラヴィアータと彼は、しかし、この明るくご機嫌な道中を中断せざるを得なくなった。走っていく先の道中に何かが飛び出せば、それはブレーキをかける。

それを視界に捉えたとき、丁度スピードは急な制動でおとなしくそ

のままの姿勢を保てる範囲を逸脱していた。のみならず、反動でつんのめる。ガクンとメーターが伸び上がった彼の下腹部を叩いて、その、息が止まるかという苦痛。

身をかめてライダーはうめくこと10数秒。コースも見事にそれで、あと数歩で危うく樹齢60年近い杉の幹にコースがクロスするところだった。

なにしやがる！と言いたくてもいえない。そんな彼の目の前に、その物体、若い女は駆け寄ってきた。

「す、すみません！」思いつきり頭を下げた。

「気をつけるよ。」男は弱弱しくもうめいてみせる。みると、かなりの美人である。長めのストレートな黒髪を後ろで束ね、そして、なんともこんな山中にはチグハグなことに真っ白なフード付きの長衣をまとっている。かなりふくよかな胸の丁度下辺りで幅広のベルトが結ばれている。そして、たぶん、華奢だが形のよい肢体を包んだローブは足下まで。

「…のせてくださいまし。」

「何だつて言うんだい、いきなり。」ライダーはその言葉を言い終わらぬうちにもう一遍反芻しなければならなかった。

周囲の草木が立ち上がったのだ。

いや、たしかにそう見せるほど、彼らの偽装は水際立っていた。たちまち二人の周囲は迷彩色の10名ばかりの集団に取り囲まれた。みると全員が飛び道具。採用されて2年はたっていない短機関銃を構えている。

すでに車を降りて、彼女のそばに立ち尽くすライダーに中の1人が銃を擬してくぐもった声で言った。

「渡していただく。お前には関係ない。」

ライダーの頭の中でパチンとなにかが弾けた。

「いきなり飛び出して誰何もなしか。そっちこそ部隊、官姓名を言

えよ。」「じりと動く。

先ほどしゃべった指揮官らしい男が目配せ。「民間人に何でも話す義務は無い。」

さらにじりつと近づく。

「ほお、いえねえのか。」今度はこちらがジリつと。

指揮官はセーフティに指をかけた

そのせつな、男は手に持った容器からなにかの粉を相手の顔めがけてぶつけた。

たちまち周囲に粉末の雲が舞い散り、男たちの集中が大いに乱れる。そのとき、すでにライダーは彼女の腕を握って引つ張った。「早くのれ！」

アイドリングをかけたバイクはクラッチを蹴飛ばし、彼女の軽い体をサイドカーに押し込むとアクセルを吹かす。

こういうときにはなぜかトラヴィアータの吹き上がりは水を得た魚のようだ。一目散に走り出した。

追っ手はあわてて走り出そうとした。だが…。

彼らの背後のさらに森の奥から影が、そう圧倒的に禍々しい殺意の影が彼らの中を走りぬけ、そして、あるものは血反吐をあるものは文字通りからだの一部を宙に飛ばして倒れていった。

その影はしかも、すでにはるか先を走るサイドカーめがけて疾駆した。

ライダーは気配に気がついたとき、すでに自分の後ろのサドルに取りすがり、しなやかでしかし強靱な腕で彼の頸部を扼していた。

振り切ろうと蛇行するライダー。そのたびにサイドカーの女は振り飛ばされそうになりながら声を上げる。だが、首に絡みついた腕はますます圧迫の度を加えるのみ。

ブレーキとクラッチ、そして急展開、同時に操作をかすむ視界の中でこなすと、反動で三人三様に側車から放り出され、宙を舞った。

生き残りの迷彩服、指揮官は片足を引きずりながらようやくの思い

でサイドカーの通り道をたどっていった。あるとき、不意に頭上に黒い影が出現したとき、視野の端で部下の首筋から真っ赤なものが吹き上げるのが目に入っていた。振り上げた銃が一気に叩き落され、みぞおちに衝撃、さらに左ひざに鋭い痛みを覚えて昏倒した。今もひざは痛みを訴え続け、そのたびに歯噛みをする。

ようやくたどり着いたその地点も道がゆるやかに曲がっている以外はごくごく平凡な山道。しかし、植生の乱れと轍が大きく乱れているのは見逃せなかった。

しかし、そこには何もない。追っていたターゲットも、突然出くわした古ぼけた車両兵姿のあの男も、サイドカーも、そして、地べたから見上げたとき、軽々と人とは思えぬ跳躍をしながら駆け去る黒くしなやかな影も。

指揮官は座り込んだ。あと、なすべきことは、さっきの場所に放置された無線のところまで行き、王都にいる上の指示を仰ぐしかない。ギリッと奥歯が鳴った。

ライダーは目を覚ます。丁度、その日38発目の榴弾が自分から50mの至近で炸裂し、彼の体をわしづかみにして放り上げ、絶叫をあげたところで、天井の板目が目に入った。

心配そうな目が覗き込んでいた。

「大丈夫ですか？」

起き上がって何か言おうとしたとたん、寢床の反対側から別の腕が一組伸びて強烈な力で彼の上体を押さえ込んだ。こっちは少しすばめた冷たい目。

「アマミク。乱暴はいけません。」

白い衣服の女が嗜めるように言った。

「…もうしわけありません。」

アマミクと呼ばれた黒いケープをまとった女が眼を伏せた。

「気がつかれたので安心しました。ご迷惑をおかけして…」

ふいに白い女はつつと後ろに下がって姿勢をただし、深々と頭をさげた。「本当に御免なさい!!」

年恰好はまだ少女といってよい。黒い艶やかな髪の毛をきれいに束ねている。白い装束の上に簡素なネックレス。顔かたちはしかし、良家の子女独特の艶やかさがある。

「いったい君たちは…」

「私はアマミク、こちらの御寮様にお仕える身だ。」

黒装束の女が答える。この女の髪の毛は、しかし、ほぼ白銀に近いブルーネット。短いその髪の前髪を額に垂らしている。

「で、なんで、その、御寮さんは道の真ん中に飛び出した？それとあの武装した連中はあんたに何をしようとした？おまけに逃げ始めた俺たちに追いつがってきたあのバケモノはなんだ？」

付け加えて口に出したいことは山積みだが、とりあえずライダーは言葉を搾り出した。

「ご、ごめんなさい…巻き込むつもりじゃ…」

さえぎるようにもう一つの声が言った。

「最後の質問から答えよう。まず、バイクにうしろから飛び乗って止めようとしたのはこの私だ。御寮様を北嶺山脈のど真ん中まで連れて行きそうな勢いだったからなあんたは。次にお前たちを襲ったのは王国軍の連中だ。我々を狩り出す任務についている。そして、御寮様はたまたまあの近在の村で癒しの施しをされた帰り道に襲われたので逃げてきたのだ。」

ライダーは声を高めた「貴様か!!」

「ああ、ああしないとお前は止まらなかった。」黒の巫女は淡々とつむぐ。

「その、お前の大事な御寮様も危うく死ぬか怪我するところだったんだぞ!!」

「大丈夫だ。」

「何だとお前!!」

「だから大丈夫だと言っている。」ふとその瞬間目線が下がって「

あの程度では私たちは死ねないようになっている。」

ライダーは目を瞑った。「信じられねえな。」

「信じる信じないは勝手だ。だが、あのときの速度はそのままとお前もただではすまなかった。」

「いちいちむかつく奴だな。」「そうよく言われる。」

心配そうに二人を見ていた白の姫君は声をかけた。

「アマミク… ご用意したお食事を。あ、あなたもお口に合うか判りませんけど…」

急に黒の巫女は頬を染めた。「申し訳ございません、御寮様。」

「アマミク、あなたはいつもは冷静沈着ですが時として気の短さを押さえきれなくなることがあります。気をつけてくださいね…。それと旅の方、改めてご迷惑をおかけしたことをお詫びします。それから、あやういところを。本当にありがとうございました。」

一瞬前のおろした少女はそこにおらず、凜とした声が部屋を満たした。

「あ、いや、本当に無事でよかったです。それとありがとう。」

男は頭をかいた。「名乗るのを忘れちゃって。ライダーと呼んでください。」

「ライダー…さん?」

「よくいぶかれますけど本名なのです。」

トラヴィータ2

その同じ刻限、皇宮で奏上を終えた宰相が謁見の間から退出したとき、老齡の銀色の髭も堂々たる老人が静かに彼に近づいた。

「殿下が？」

宰相は少し小首を傾げると、秘書官に待機を命じて、皇太子付き侍従長であるその老人の後に従い、広い回廊を歩んでいった。

普段は東宮御殿にいます皇太子は、公務のときに使用する少し彼の身分からすると手狭な一室で待っていた。

ここは、実は幼少の頃から秘密基地のような扱いにしている、乳母や侍従たちも入れぬ特別な場所。同じ年配の宰相は少年時代何度も入ったことのあるなじみの深い場所だった。

「やあ、クリフ。ここはひさしぶりだろ。」いたずらっ子の笑顔。

「皇太子殿下ご機嫌うるわしゅう。」

「いいよ、今は昔どおりカールで。あ、少しは飲むんだろ？今でも。」

「ええ。寝酒は一日おきと口すっぱく言うのがいますが。」

破顔一笑。「この手の悪徳が国を滅ぼすと言い張る手合いが増えたものだね。実際はもつと別なものが危険なんだが。」

本来は先に誰かが用意するのだが、すでに皇位継承第一位の皇族は自らの手でケースから酒瓶を出し、2個のグラスに中の液体を注いでいた。

「恐縮です。」

最初の一口をすすると、二人はすこしくつろいだ。

「大公から何か聞いてないかい？この夏、王国の離宮にうかがうことに決まったよ。」

「初耳です。準備にかかりませんといけませんね。」

「やれやれ、あの叔父御は結構粗忽者だからな。君に何もいわんと

は。」

「ただ、今の時季なら特段大きな問題ありませんから、よいと思います。外務大臣に言っておきましょう。」

「たのむよ。私も『トラヴィアータ』の君に会うのは久しぶりだ。」

「カール殿下、そのあだ名は少し……。」

「はは、私がつけたんだけどね、そのあだ名は。『世のしがらみに収まらぬ方』。そんな意味でつけたんだが、確かに色々な意味で超越しているよ彼女は。たいしたものだ。」

「もうひとつ、その不穏当な意味もありますが……」

「あばずれ、そうだろ」小さくウィンク。宰相は少し返答に窮した。「君が、あの人の双子の妹と仲がよかったのは知っている。あのときは私も悲しかったよ。」

何が言いたい？不遜な言葉が胸の中で旧友に向けられた。

皇族であるところの親友は少しまじめなときのくせで口をへの字に結んでから、口を開いた。

「宰相としての君が属領について心を砕くのはわかる。しかし、最近妙な噂を聞くぞ。手駒として小さい兄妹を使っているそうだが、まあ、それはよくあることだ。だがな。」

すでにグラスは半ばまで空いていたが、目線には酔いのかけらは微塵も無い。

「あの動乱以後、わが領内のみならず、かのウインスラント民が住むウインスラント本国はもちろん、王国領にも人を密かに派遣して探っているようだ。何を求めている？」

「もともとウインスラントは我国にも王国に対しても、自民族に対しては国境の出入国は恐ろしいくらいゆるいのです。ご存知と思いますが、不逞のやからも出入りしかねません。また、王国の密命を受けた工作員も頻繁に動いていると申します。特段の注視は必要です。」

「うん、少し入れ込みが過ぎるという噂があったんでな、どんなものか。」「あの事件のあと、姿を消した公爵家の女中を今でも追

つているというものがいるんだよ。あの者はたしか属領出身だった
が。」

「もう何年も情報が途絶えています。確かに二人のお付き女中でした
が、すでに過ぎたこととあきらめていますよ。」

皇太子はふうつと息を吸うと、またさっきのいたずら笑顔にもどつ
た。

「初恋の人の面影というのは忘れがたいものだ。たしかにあの件は
不幸だったが、その片方が今では隣国の君主なのだよ。最近とみに
過激共和派が両国ともに浸透してきている。武装蜂起で国を転覆し
ようという大それた連中だが、小国とは言えども南のほうでは成功
して共和制を宣言している。」

「おこがましいことではございますが、人は従う権威を常に欲して
います。宗教、民族、経済、武力。権威を持つものはまた別の意味
合いも知らねばなりますまい。」

「人間の一生なんて短いものだ。何かをやれる能力も限られる。政
治などそれを前提にしないかぎりは成り立たないよ。だが、もし、
死なない超人がいて、しかも人間とは捕食者とエサの関係になつた
ら、これはまずどうするか……だな。」

宰相は少し目を伏せた。用心深く切り出した。

「……ご存知でいらつしやるんですね？ 殿下。永遠の生を生きるもの
どもを。」

「ああ、しかも、ときに我々に害をなす存在だ。かれらから永遠の
生を奪う方法、それも効率的に奪う方法を。」

恐ろしく無邪気に次期皇帝は笑って見せた。「それができたら、こ
の世界では権威は一つになるな。ぜひ、研究してみてほしい。」

そついいながら、彼は一冊の少し大きめのファイルを彼のほうにす
つと押しやった。

それを開いた宰相の手のひらは、やがてじつとりと汗ばんでいった。

…人体に限らず、全ての生命体は閉じた体系の中にあるといえる。あらかじめ細胞核の上に書き込まれたという情報に基づいて各細胞を形成し、それぞれの役割に応じてエネルギーを取り込み消費し、新陳代謝を繰り返す、という仮説が正しいとするならば、エントロピーの減少とともに代謝は衰え、やがて朽ちる。

がん細胞とは、そのような情報が齟齬をきたし、ただひたすら均質な分裂拡大を続ける存在で、それ自体は他の体細胞となんら変わらない意思無き占拠者といえるが、もしこのような細胞の核に違う情報、すなわち健全な体細胞以上に活発な活動をもたらす情報が盛られ、閉じた人体の中でむしろエントロピーを増大し続ける存在として、元の体細胞に代わって増殖し続け、ついに全てを乗っ取ることに成功したらどうだろうか。

つまり、脳を含む全ての器官でこのような細胞の入れ替わりが劇的に起こった場合、その人間は一旦死ぬが、それを苗床として新たな生命として復活することが可能になるう。

常にエントロピー増大を求める核情報はその新生者に強大なパワーと超常的な能力を与えることになるう。

だが同時に、そのようなものを閉じた生体に閉じ込めることはいずれば不可能になる。すなわち、そこで、細胞全てのエントロピー増大の傾向、欲求を抑えるべく、かつての閉じた、やがては衰える生体記憶も適宜注入してやる必要が生じると考えられる。

彼らが頻繁に行う、吸血、生肉食とはそのような抑制剤注入のとき性質を持つのではないかというのが目下の仮説である。…

かれこれこの小部屋に来てから2時間かけて宰相は手にしたファイルを広げながら、読み進めた。

「君は実はもう聴いている話だろう？」

皇太子Ⅱかつての学友は口を開いた。

「ええ、概略は閣議で。しかし、実際に手にとって読むのは今回が

初めてです。」

属領における衛生事情、という面白みの無いタイトルでまとめられた何枚ものレポート、そして図表、写真、グラフ類。それらの指し示すものは唯一つ。

この世に在るということすらはばかられる存在。人の生血と死肉を食らい、超人的な破壊力を発揮し、決して死なない存在。吸血鬼。誰かに噛み付き、血をすすると同時に、相手の体内に伝播性の強い万能細胞を残し、発芽させる。いずれその相手は全てを塗り替えられ吸血鬼として復活せざるを得ない。

永遠に死なない、死ぬことのできない生。

「細胞も結局分子でできている、そうだろう？なら、分子そのものを砕いてしまえばいい。」皇太子はこともなげに言った。

「それに直接焼き尽くせなくても、放射線障害者だ。いずれもう一つの侵略者、がん細胞が増殖するそうだ。」

彼らを特定疾病者として隔離することができる。

「つまり、君が今命じている新型の兵器は全てにおいて我々の権威を保障してくれるということだよな。」しずかに笑う。

宰相は上を見上げた。いちいち、言うことが当たっているだけになにか逆鱗をかける言葉を探すが無駄だった。

「ただ、もちろん、実際にわが属領や隣国に向けて使用すると決まったことではありません。あくまで、我々の権威を示す、そのためです。」

「女王がおなじものを欲している。その手助けもそのためなんだろう？」

「お互いが保有すれば、決定的な対立は防げます。」

「君が保有にこだわる理由はそれだけじゃあるまい。」皇子は足を組み替えて言った。

「あの女王の妹が実は生きている、君はそう疑っている、そうだろう？」
「そして、もうすでに眷属化しているかもしれない。」

宰相はすでに氷のような視線を向けていた。受けた皇子は静かに言う「勘違いしないでくれよ。君の手助けがしたいんだ。それに。」

「吸血鬼といえども、わが臣民にはちがいない。」

「わかっています。」少し強い語気とともに宰相は部屋を出て行った。無作法をとがめるところか、皇太子はしずかに笑みを浮かべて後姿を見送った。

「昔から、そう、少年の頃から他人への思いやりが溢れるよい男だよ、宰相。だがときどき酷く気短になることを押さえきれないというのが欠点だ。大丈夫、私が注意してあげよ。」

ひとりごとと残された琥珀色の液体を飲み干した。

雷

帝國西部に広がる草原地帯。そこに広大な敷地を有する飛行場と工場のコンプレックスがあった。

その日、何本かの大滑走路の一つに面した飛行機メーカーの格納庫の巨大な扉がゆっくりと開けられた。

エプロンにたたずむ多くの観衆からどよめきが起こった。

数年前に巨費を投じて完成した格納庫。本来は飛行船建造にも転用可能という設計であったため、天井が他のものよりも格段に高く、それだけでも遠目からは異様な姿を見せていた。そんな鉄骨を壁面に縦横に張り巡らした格納庫の中、彼女はその威容にフラッシュの嵐が襲い掛かるのをほしいままにしてその長大な翼を休めていた。

飛行機素材が軽金属材料により取って代わられて以来の流行を推し進めた抵抗係数の少ない流線型、そして単翼機が主流になってからほんの数年しかたっていない。しかし、今までのどの輸送機や爆撃機よりも大きなその機体は、まず、その未来から来たともいえる機体のラインで観衆を魅了した。

ほぼ完全な円形断面の胴体はすらりと後方に伸び、少し切れ上がった尾部には形のよい大きな尾翼がそびえていた。機首は突起のない全面を透明アクリルで包まれた、何かのタマゴのようなのっぺりとしたもの。前縁の少し後退角のついたアスペクト費の大きい主翼はまっすぐ上半角を保ったまま伸び、そして、特徴的には、巨大な5枚プロペラをプッシャー式に回す2機の大きな液冷エンジンの外側にほぼ同じ大きさの平べったいポッドが下がり、それには各々2個ずつの吸気口と噴射口が前後に見えていた。尾部には窓のついた機関砲の銃座、そして、今は外からは見えないが、機体の前後4箇所につき込み式の防御用銃座も用意されていた。胴体の下面、かなりの部分をしめる爆弾倉の折りたたみドア、そこに秘められる予定の

搭載物のポリウムへの想像が容易にこの爆撃機の強大さを表していた。

銀色に輝く機体の機種には、大きな青文字で「バーナム魂」とでかでかと記されていた。

この基地のもっとも近所の都市、バーナムにちなんで付けられた名前。もちろん軍公式のものではないが、航空機工場とその関連企業に市民の多くが職を得、それに付随して発展しつつある同市はあらゆる面で基地に対して全面的に協力的であった。それゆえのさやかな軍からの贈り物が、今日配属になった新型機の量産機のスマートなノーズに燦然と誇らしげに輝いている。

トレーラーで静々と引き出された銀白の意志は、やがてエプロンを遠巻きにする群集の前で止まると、何人かの男たちが近づいてきて点検を開始する。マニュアルに従うならもつと煩わしい手順があるがすでにそのほとんどはセレモニー前にすませてある。軍がいかにか真剣かつひな鳥を愛でるように大予算を投入したか機体を扱うかをアピールするセレモニー。

やがて、長々とした来賓の挨拶が済み、本日の主役、飛行隊長である機長が壇上でバーナムの市長に飛行服のまま硬く握手を交わすと、市長は言った。

「大事に使ってくれたまえよ。」

機長は笑って答えた。

「手綱を緩めず拍車をいれよ、ただし飼葉はもりたくさん。で行きますとも。」

騎兵の古い箴言を口にする、ん十年前に馬上揺られて辺境警備の経験のある市長は破顔した。

機長以下のクルーが乗り込むと、やがてまずピストンエンジンがスターターの唸りとともに身震いして一瞬排気管から黒々とした気体の固まりが吐き出され、唸りをあげて大振りのプロペラが回転を始

める。耳をふさいでいる観衆が目立つ中、高音の唸り声とともに4基のジェットエンジンが始動、やがてざわめきも完全に封殺する爆音となった。太い腕ほどの太さのあるケーブルをソケットから抜いた整備員がそれを電源車両に積み込んでハンガー裏に走り去ると、轟音は一段とたかまり、空気をびりびりと振動させた。

管制塔からタキシード許可を得ると機長は機重を支える10本のタイヤにかかるブレーキを解除し、自力で機体を滑走路に運んでいった。従来の小型機に見慣れた目には異界の怪物が降臨して何かを目指して進軍しているかのように見える。

滑走路に並行して機体の姿勢を整えた機長は副操縦士に離陸準備終了を管制塔に通知させる。管制塔は風向、温度、湿度、などのデータを淡々として伝えたあと、コース上クリア、離陸OKを伝える。

「手綱を緩めず拍車をいれよ」機体は滑走路上を突進し、その長さの中ほどで機体を浮かせ、やがて離陸した。観衆の歓声はここまで聞こえては来ない。

大きくバンクした機体は一旦芥子粒ほどの高さまで上昇していく。地上のアナウンスがスピーカーから、高度1万メートルの巡航高度があり、その高さでも与圧装置のおかげで乗員は快適だとさえうっていた。白い飛行機雲がまっすぐ伸びてゆく。

一旦消えたと思った機影はしかし、今度は滑走路を逆の方向から低空で進入を開始した。

目を凝らす観衆はここで驚きの声。今度は同じ6機の機影が飛び込んできたのだ。

帝都近郊のテストセンターで飛行試験を繰り返してきた先行量産型のフル出勤、その編隊を「バーナム魂」が先頭になって率いている。アナウンスは爆音に負けじと、これらの機体がすべて量産型に改修しなおされて当基地に配備されるとかなりたてる。

市長は口をあけたままかすれた声で「とべとべひこうき」と口ずさんでいた。横から夫人の咎めるような視線を感じて我に帰った彼は、咳き込んだ後、こぶしを握って振り上げ、絶叫した。

「いけええ！！ベイビー！！」

壁の目1

ウインスラント。帝國と王国にはさまれ、暖かな海流に洗われる海岸部から北部の北黎山脈までの広がりをもつ。温暖な気候に恵まれる一方で比較的狭い平野部と、寒暖の差の激しい山がちな内陸部に分かれる。

その民族については、近隣の王国、帝國いずれのものとも異なり、風俗、文化もまったく浮き上がっている。しかも、土地柄から小単位ごとに割拠してきた時代の長さから、これまた同じ民族内でもかなりの差異が生じている。

いや、実は民俗学者を悩ませている最大の問題は、そんなことではなく、彼らがいつたいたいどこから来てこの地に定住するようになったか皆目不明と言うことだ。

大まかに言って彼らは東部族と西部族と呼ばれてきた。お互い反目することも無く、ただなんとなく違いを意識しながらこの地で生きたきたわけだが、一つの国家としてまとまる頃から、イヤが上でも民族意識というものが芽生え始めた。

実は、彼らが定住した場所は現国境の外側にも広がっている、と言うよりも、帝國、王国それぞれがその国内統治を固め、国境を画定させるためにあるときには交易や交渉で、時には剣を振るつたために、居住地のいくばくかが隣国に編入されたということである。帝國はその慣習にのっとり、属領とし、住人は属領民、2級市民としたが、その後の立憲君主制確立と3代前の皇帝による撫民策により属領民と帝國市民との法的地位の差別は撤廃されてきた。もつとも人の内面まではそうそうおいそれと変えることはできず、年配者のなかには属領民と見ると違和感を隠そうとしないものもいるが、比

較的融和に成功した例として各国では語られる。

王国側はそれほど単純ではなかった。直轄領としたため、行政、徴税について王室派遣の知事による強引さが怨嗟の声を巻き起こした。法的にはまったく平等だが、新しく民になったものの、王国臣民にふさわしい水準に至らない。このような上からの目線が彼らを痛く刺激したのは論を待たない。彼らはそのためにことあるごとに本国領への復帰を唱えるようになり、分離主義者として都度弾圧された。その肝心のウインスラント本国が、しかしながら大混乱に陥ったのが25年ほど前である。

当時、大洋を隔てた大陸の北半分を占めるある大帝国で叛乱がおき、首都で宮廷が破壊される騒乱となった。反乱者は悪逆な皇室の支配からの人民の解放を叫び、軍を味方にした政治グループ。彼らは自営業者、工業家、銀行家たちが帝室を操り、そのかし、国民搾取の犠牲の上で繁栄を謳歌しているとして、皇室と彼ら資本家を抹殺し、政治エリートの正しい指導の下に全ての企業、耕作地を国有化し、平等な社会を作らねばならない、と叫び決起した。

この革命は衝撃を世界に与えた。助命嘆願にも関わらず、皇帝一家が無残に処刑され、あらゆる民営の工場、商店、輸送機関が接收されるにしたがって、各国は次々新しい国家「人民連合と断交していった。

だが、人民連合は意に介さなかった。彼らは自国が豊かで資源に富み、自給自足が成立すると踏んでいた。さらに、彼らは友邦は自身の手で作る者だと認識していた。

人類の歴史上もっとも先進的な政権が出来たのだ。他の恵まれない民、属領、植民地は我々に続くべきである。旧来の帝室の華麗な装飾を誇る旗から、生地の大半を鮮血のような真紅に染め抜いた意匠の新国旗を掲げた人民連合の首脳たちはそのための援助は惜しむべきではないと結論を下した。

大海原を渡って人民連合に来ていたウインスラントの主に西北部の主義者集団は、高度な思想教育の後に郷里へと帰っていった。彼らが蜂起するのはその翌年。当初はウインスラントを治める大公政府による反撃で風前の灯だったが、その後形勢が逆転した。ウインスラント人民の正義の闘争に連帯すると称してある日この国最大の港湾のすぐ外側に人民連合海軍の艦隊に護衛された大規模な船団が押しかけ、入港を求めたのだ。

隣国の帝國と王国両国は艦隊と陸軍の派遣を求められると応諾、直ちに派遣準備に入り、第3国経由で人民連合に抗議を行った。両者はにらみ合い、一触即発となった。

この均衡が少なからず破れたのは、王国内の分離主義者のテロのためだった。この背後に主義者集団がいると見た王国軍がただちに領内の主義者の徹底鎮圧を要求、国境をわたる態勢をとったため、すでにほぼウインスラントのほぼ半分を支配下に置き、首都進撃をも伺った武装集団は、腹背に敵を受けて現状維持がやっととなった。

翌年、停戦協議。何度目かの決裂とそのたびの流血の後、結局ウインスラント東北部の一部をもって独立した人民共和国政府の樹立が認められた。これはやはり人民連合の無言の威圧が効いたための他の三国の妥協の結果であったが、その代わり、人民共和国領そのものは南部にある小港を含むわずかな海岸線以外はすべて王国軍、ウインスラント大公国軍双方に厳格に封鎖され、出入りそのものがまならなくなった。そして王国内のウインスラント遺民は全て郷里との交通を断ち切られたのである。

それから、20年以上たったある日、王国軍が人民共和国に侵攻を開始した。鉾山開発利権をめぐる争いで、人民共和国が大公国に宣戦を布告したためである。今回は人民海軍の主力艦隊が隠れも無き

姿で乗り込もうとしていた。しかし、王国軍は軍事的天才をもつてなる新国王のもと、電撃的に侵攻作戦を実施、かつては大公領の東の中核都市である共和国首都へ気がついたときには指呼の間というところまで接近していた。

あわやというところで、王国軍の停戦命令が出なければ、首都は陥落していたはずである。

ところで、この戦争に関して、帝國のとつた態度はまことに不可思議なものでつた。まず、国境を厳に固めるとともに、大公に対して領内への進駐を提案、これを容れられると直ちに精鋭2個軍団を派遣し、国境地帯に急行した。ところが、この部隊は大きく共和国内に入ると、共和国首都を守備隊や突っ込む王国軍もろとも大きくはさむ態勢をとつた。その一方で交戦国双方に停戦をよびかけ、休戦交渉の音頭をとり始めた。

結局、人民連合首都での帝國特使と人民連合最高幹部会議長の会見で合意のアウトラインが作られ、案を吞まされた人民連合は、今度は王国軍の安全な撤退を保障する役回りを演じさせられる羽目に陥つた。

この戦争劇の最大の焦点は帝國が提案し、半ば恫喝する形で押し通した2つの条件である。一つはウィンスラント領内での鉱山採掘権の差別なき開放。もう一つは、帝國、王国、そして東西ウィンスラント両国の各住民グループ、村落の生活実態調査のための国際調査団（主体は帝國）の無条件な受け入れと彼らの制限なき活動だった。戦火がおさまったことには歓迎しながらも、帝國臣民すら首をかしげるこの一連の出来事の真相が明らかになるにはいま少し時間が必要になる。

とまれ、そのような喧騒など無かつたかのように、ウィンスラント

大公国首都ヴルムントはその穏やかなたたずまいをその日も見せていた。

壁の目2

「壁の目2」

そこからはるかに離れた空の下。大洋を隔てた人民連合の首都では耳目をそばだてる出来事が起きようとしていた。

大理石で作られた帝政時代の巨大な王宮。何事にも大振りなことを好む、この地に住む人々の趣味を反映して、世界一というのが誉れであるその白亜の宮殿の中、最大の広場、帝政末期、湧き上がる民主化要求の声の中、最初の欽定議会が召集され、やがて革命の舞台になった人民大会議場にみなぎっていたのは、実は人数にもかかわらず、押し殺したような沈黙。

その中で、壮年の神経質そうな男が眼鏡をゆすりながら登壇した。もそもそ、低い声で話し始めた男の話は大略このようなもの。

わが輝かしき革命以来、人民連合が帝国主義諸国の圧迫干渉、卑劣な謀略にもかかわらず、今日人類を指導し、輝かしき正統なる社会主義の道を進み続けてきたのも、ひとえに、党の立派な指導の下、各自治州人民が常に警戒を怠らず、より多く高く目標を求めてまい進したがゆえである。そして、それは偉大な教師にして国父、プロレタリア社会主義革命の正しき継承者、前書記長の英邁な指導なるがゆえである。

しかし、まことに残念至極なことに巨星は落ちた。彼は長い間病を患い、ついに先日その革命的生涯を閉じた。その訃報に接したとき、われわれの胸に去来した虚しさはいかばかりだったか…

会場のあちこちですすり泣きの声が上がった。しわだらけの顔をゆがめ、否、否、と泣き喚く中年女も見える。

だがしかし、と男は少しころあいを見計らって続けた。

我が人民連合が歴史的必然として歩みを続けていく限り、われわれには当然のこととして、ここで立ち止まることは許されない。幸いなこととして、われわれには、より若い、力に満ちた、そして一閃する白刃のごとき英知と鋭い戦略勘を兼ね備えた才能がすでに幕間に用意されている。同志よ、われわれは誇るべきである。時期書記長として、現民族問題担当書記、アーニャ・パプロフカ・リエンがいることを！

男は彼にしては芝居がかったポーズで上体をふるって、ひな壇の端を指し示した。そこに立っていたのは10代前半といっても不思議ではない少女が、独特な詰襟で長めの民族服姿で立っていた。丸い顔、細い切れ長の目、そして、銀色といってよいつややかな長い白髪が頭部でみづらに編まれている。

小さい影はコツコツと靴音を鳴らしながら、ひな壇の中央に行く。男が場所を替わったところに立つと、彼女はここで初めて少しはにかんだようなしぐさを見せた。

観衆はやはり静かにしていた。あつけに取られた者もいたにはいたが、そのほかのものは何事かでも感情を内面に押し込めたまま無表情だ。

少女はやつと意を決したのか、顔を上げ、マイクに向けて話し始めた。それは少し、か細い話始だった。

ここに集まったすべての各州、各民族代議員の皆さん。我々の偉大な先達、革命第一世代の指導者が死にました。

死とは必ず人類が迎えねばならない運命です。しかし、我々はそれをも乗り越えて進まねばなりません…

娘の声色はたしかに熱を徐々にこめて言ったが、しかし、ゆっくり

とかんで含めるような物言いは一貫していた。そして、この部分に差し掛かったところで、声色は一気に高鳴った。

私たちがこの大陸に逼塞していることが人類社会のためになるという帝國や王国のものどものさげすみの言葉に忍従の思い出すごした黨員の皆さん！国民の諸君！我々はかれら驕った君主や議會政治屋どもの影で常に戦争と侵略、そして搾取を企む資本主義者どもの悪辣な謀略をいつまで辛抱しなければならないのか！100年？10年？いや1年？

否！否！吼えるような異議の声が会場をしばし圧した。
少しトーンを下げて彼女は続ける。

私たちは、そして、我が人民連合以外で圧迫と隷従に耐えるすべての被支配人民はすでに待つことに飽き飽きしているのです。かの王国の女王のごとき、恣意で国富を蕩尽し、かの帝國の支配者どものように、権威に名を借りて搾取に励むものども、この唾棄すべき連中に正義の鉄槌を機会あらば与え続けることこそが、わが連合の歴史的責務です。そのためには我が党はあらゆる犠牲を惜しまないでしょう。

我々が今すぐに準備に入り、彼らの思い通りにはいかないということを見せ付けてやる。そのためにすべてを費やすべきです！

ウラー！、という掛け声が澎湃と巻き起こった。

彼女は初めて大降りに腕を振った。少し長めでゆったりした袖が羽衣のようにまった。

と、瞬時に会場の喧騒がやむ。

思えば、最初に死は必然と申し上げました。しかし、この世には死

をも超越した人々がいます。普通の人間よりも長い経験と時間を有する人々。最初、「無知蒙昧なころ、宗教家の脅しと君主、資本家の巧妙な策略で我々は彼らを怖れました。しかし、

背の低い彼女は伸びをした。そして両手をかかげて握り締めた。

誰でもそうなりうる運命を有します。そしてそれはわが連合の科学アカデミーの手によって原理、その他が明らかになります。そう。彼ら吸血鬼もまたわが同胞、革命の戦列とともに並ぶ同志なのです！

そしてその種族の多くがいまだに王国と帝國の圧迫を受けている土地、ウインスランドの人民から応援を求めるアピールが最高人民幹部会に届けられている。この事態を見過ごすことは正しいのでしょうか？吸血鬼のみならずすべての人民を解放することになるにもかかわらず？

つぶやくような 否、否の声がざわめいてきた。

偉大な人民革命の父たちの偉業を最終的に達成する歴史的使命を果たすことを私はここに提案いたします。同志の皆さん！今こそ隊伍を整えるときなのです。

我が人民連合に栄光を！

津波のような拍手が熱気のコもった会場にこだまし、絶える事は無かった。しかし、彼女の切れ長な目はむしろ冷やかに見つめ続けていた。そこには最初の少しあどけない色は微塵も無かったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4155f/>

血族の譜

2010年10月18日07時42分発行